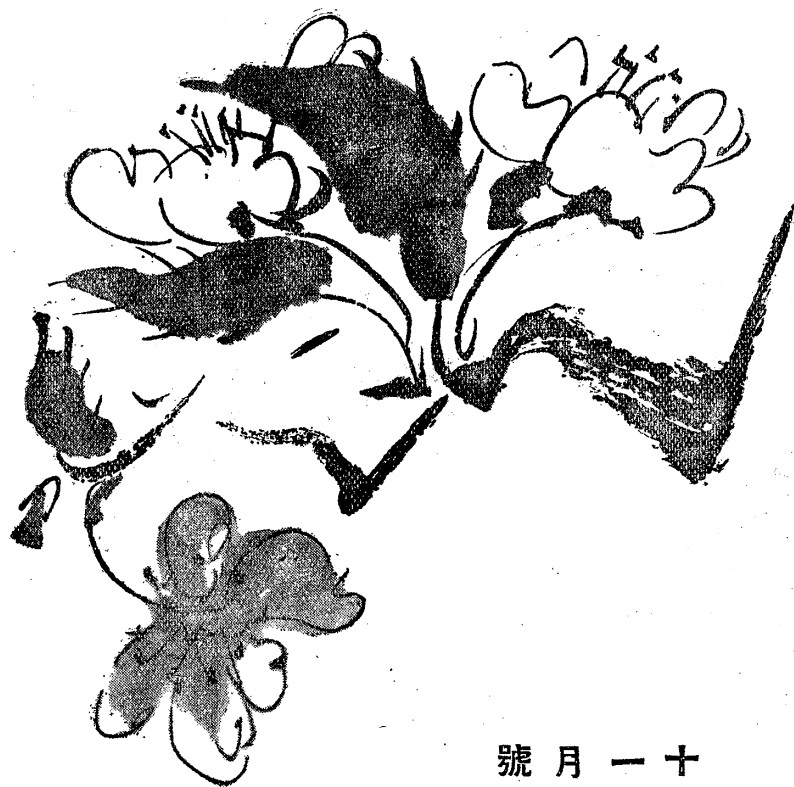


# 新句月本

第二卷 第一號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可  
昭和二十年十一月一日（毎月一回）發行

昭和二十年七月廿五日印刷納本



十一月號

俳句 日本作品

秋の日觀世音詣おしめりが過ぎた雨中

細谷 不句

兄弟がかへりてゐ温いご飯茄子汁

加々美 青河

秋日がてり大いなる傾斜のみち人らなまめ

山田 宗作

眞夏の晝食少々拵へる木鉢にて娘

安齋 櫻磗子

怨みなしの顔ゆきもどりの人たち吾亦紅あるみち

松宮 寒骨

ぼうぼうすまひ草が揺れて青瓜青う熟れる

池田 亞杜子

堪へ栖み堪へくらす山の夜にして星空

福島 一思

秋暑し掬げて持つ人參も傘も

武田 露明

道を身を横にし走る牛を見る蓼の穂を見る

妹尾 美雄

戦後このやう咲きつゞける鶏頭にして村々

池田 亞杜子

こゝに死すと期せし屋根の南瓜花

池田 亞杜子

悲憤抑へくこゝにある朝顔の鉢

池田 亞杜子

乗越に出る小屋場平らに草花

池田 亞杜子

雲一方に動くこの朝大根蒔きたり

池田 亞杜子

今日ひとりて居る法師蟬やらばつたやら

池田 亞杜子

いくさやみしわれに來るうつる穂蓼と

池田 亞杜子

秋風立つ藜の葉裏返しして母娘

池田 亞杜子

供養をうける間引菜ほそぼその汁

池田 亞杜子

袈裟をたむ四つ折になむすだれのかげに

池田 亞杜子

炒り米かみしめて出づ八朔の風吹くへ出づ

池田 亞杜子

竹ばやし野分してゐる一家總出してゐる

鬼にやる草のすぐ干てしまふ日中

山の水うましうして私らが捕へる澤蟹

あすも來よう山の風吹くところいちごを採る

川音絶ゆるなし唐黍を切りたふす人

世とすゝむ人たち箒草叢生す

遠くを見ずわが立つにつんつん艸の葉

水を飲め子ども柿の實がしつかり青い

艸々衰へず子どもが積木あそびの庭へつゞく

見るからに木槿かはりなき花をわが世あらたまる

霧ふかき中野菊の花とわれら堪へる

あはれ生くる御民われ眼に青すゝき

世の草や木やいづかたも夏葎

草みのる野に出でゝ我がかんばせ

溝一すぢ朝風野づら穂の草

稻花どきの一びきの蛙うごかず

わが思ふことのなしあるいてキャベツ畑を見た

しばらくは畑の平面を見て竹籾をすぐる秋の日

秋彼岸の佛たちをおもふに畑土みな黒し

畑に大根伸びた母とくらすにこまんしたといふ

道はたこれの草の花少女に咲けり

貨物列車カーブ大きく曲る木の芽にほひし

葎萌える根こそぎ抜ききたり

五月冷えん御花手向ける

山吹にて咲く葎本當に青い

九貫十中花

加々美 青河

山田 宗作

福島 一思

池田 亞杜子

蒼浦音なく咲く昏くなる足元  
老父逝く

ちゝが危篤の雪の野を遅き月いで  
雪に掘りし土ありて白き柩を埋む  
病妻逝く

頬白なく朝々いでゆ波み顔を拭きたり  
佛飯しるき布のうへ著我もうごかず  
日数絶て溪にうつぎの花あかし小きき瀧あり  
春宵雨となる楠の大樹のかけ

瀬音漸くたかまる夕暮を摘む茶  
地を突き出でし筈に朝濡りある地  
家族に朝の分擔ありいま戸を開ける夏空  
地にごとみて去らぬ子ら土筆とる子達

もとのふる里の住居山が夏山  
夜ひとり越す峠頭に夏木の風來  
山家の朝は虎杖とわれらに山が迫りくる  
紫陽花かたまつて咲き耳が遠い老農

猫車も馴れて押す溝へ夢の青い葉  
冬の日野をみてをるに羽音なくとべる鶴  
しきりに子を思ふ日の目で地に碎けたるつらゝ  
子供たくさんあるしあはせ冬朝茶汁食ふ男

巖が一つ一つ雪かむり浪の中小さい巖  
松の高い梢がみえて日なすこす二三日雪の日  
學校の歸り足袋ぬいで頭から頭からぬれ  
虎杖のびる平地へ平地おりの

小林滿巨斗

蓬萊鶯郎

中原我樂

谷 しのいち

木内柳院

そらの機音蛙はら白く  
梅雨はれる大工とその弟子  
すゝき青きもよるこぼずうつるにみつむ

世紀の轉機吾等に高き今年竹  
今朝の露草にわが思ふは妻子の上  
夕がほ咲く里に子供ははれむる我を離れて

現實秋くる風が吹く終日土手の草にも  
人それぞれに窓近く柿の木ありて  
杓子菜を蒔く父母とありしやう朝の蟬なく  
驛を出て野畑稔りの道をゆく一すぢ

棲みつきせせらぎの音ぞひがん花ぞ  
まんじゆきけのひるとなる土の手を洗ふ  
のこしてまんじゆきげ草刈りすゝめるじとどに露  
再び建つことのみ秋ぶかい空のいろ

群生す笹つ葉にそよぐに秋ふかめる雨  
又寒くなつた柿の木雀も僕も  
或はもう味が噛めまい母へ土産の漬鳥で  
音なく降る雪となつた亡父の普譜圖面に對ふ

この家に歸住遠からじ櫛の雪掃く  
一つ一つの袋に任分け粉も蠡も母の心  
南瓜割つてある種のおつめられてる歸還  
枯葉吹き飛ぶ日がな日とて熊を見てある

人ない道のよるしき湯谷に添ひて足向くすすき  
葉見であるは取るにまさりて稚蔭なじむ  
湖へ峯へこの雲の流れずつと海に入らず

佐々木 四雨樓

根岸榮一郎

森 林 五

鈴木梅宇人

中村久重

早川 昇

職域短日のうどん二杯これも奉公  
 月當番月の夜より配給の魚さげてそして柿一枝  
 月の鹿寄りきて鳴けりこゝは町の中  
 月にやれのあかるいこほろぎ  
 おとばききのあめの松あなをく  
 綱つなを引く濱の男たち萩ふんでゐる  
 湖あかるい風とすすきをゆく  
 日本ありがたしとんぼ飛ぶ空を見てゐる  
 その日の落日大地にふしてひとり  
 夏菊結けて新しき明日をまつともしき  
 生きとし生きむ夏草の茂みに立ち  
 日蔭をひろうて産業戦士互に別れ  
 その風を秋風と知つて子と話す母  
 蕪村一幅粟のむけたのが盆にあり話しす  
 秋草の雲のゆき來をかきおとしてある紙  
 校にとゞいた陽のやわらかい柿になつてゐる  
 月打つ積雪や雪の精猫を呼ぶ  
 夢ありありラシプの硝子としんと  
 七十媼もつら魂雪國の雪の道  
 米山いないな尾神早春の影見る  
 あくたもくた雪へ雪といへみ佛近し

遺稿

松金指月堂  
 佐藤鳴風子  
 照井稗人  
 樋田東谷  
 宇野豕篠  
 稻垣一鳴  
 井出臺水

汝飯焚け吾は貝を彼岸またしむ  
 時とて丸寝の夢は孫六の拜み斬  
 夜明け寄す波碎け碎けるこころ白くなる  
 いよよ一つ家疎開者われを陽も山の端に  
 峯のふくらみ山は山の姿が飛ぶ鳥  
 迷び犬人の瞳集め桃色に昏れなん海  
 煙草啜へてまどろみの川の水光り  
 隊友別れゆく夕立の中門に柳あり  
 終日地を這ひまわり大の字に蚊帳の中  
 秋の風隼毛を吹く山に白衣觀音立たせ給ふ  
 つとめて笑つて病むにこゝ明るい月  
 手にしてみしも夕べ蜻蛉らの世界  
 この藁草履のあたたかさ段々畑を下る  
 蝗蝗におんぶしてみおのり、浮雲  
 いまに待避所の捲蓋がつちりと鶏頭燃えてる  
 秋を思ひ鳴にふられ句がまとまりかかる  
 一と木の秋日にげさつと便りが日のさす  
 こらえんとして涙御玉音の炎天に直立す  
 池の水満水子供堤に顔出してゐる  
 お地藏さまは文化のお年草の茂り  
 うちだけでない子の墓へダリアを忌日

久野仙福  
 吉沼晴穂  
 加藤迷々可  
 米倉勇美  
 大島律花  
 淡路呼潮  
 佐藤厚吉  
 高橋長太郎  
 池田房代  
 鈴木長司  
 上原晃雨草  
 飯島郁歩  
 川谷岩男  
 古川直右  
 横山空華  
 井上一二

栗林公園日暮亭  
 むかし二代様がお茶たててこの窓藤の實  
 二百十日のはねつるべしづかに夕やけ  
 八月十五日二句

鏡にのこをもちきく大みことのりあやにかしこし

井手逸郎

山川の瀬の音のまぎれなき國のいのちとはにと思ふ  
とりがとやを出てゐるしげらくとやにある夏の日ざし

月がおちかかり柿の木火の見のはしが月のかげ  
炭が山すそそまで出して積んであつて梅のつぼみへ日ざし  
蓮池に蓮の花が朝になると人を滿載してくるトラツク

三好叢一路

罹災して神戸より山陰に移る

朝は流れて顔洗うてゐる 前の櫻並木  
霧ふかきこれが棉の木花咲きこの土地の人になるべく

二階に住み階下から何か皿に貰つたもので晝飯にする  
二階の一室は借りられて壁に昔の新聞などの記事

雲は雨まだおさまらぬ唐辛子の實赤い出てゆく  
月が雲を出て山の木の中の、小屋月夜

小谷信夫

枯山は日のおもて雲が通るとききの雲  
手打うどんの白い太い夏の雨である

草が影つてくる田に添うて水の落ちてゐる道  
白浪立つ風が夾竹桃にけふ聯合軍上陸

吉田六郎

眞晝青葉の青い光りが水源池近い水音です  
秋、何年ぶりの航空燈の廻律も靜かなる仕事のことと

ひぐらし鳴くひとりぐらしの茶わんは伏せとく  
床にゐなければ机にゐなければ一寸出てゐます桐の花

井上有紀男

學校のそば流れ川、山羊のあて夏雲の靜かな  
さてこれから来るものは、夾竹桃さく残晝の街を曲つていく  
訪れて、お年とられたようにもないが今年の茄子が秋日和な

たたみに茶碗が裏山が秋

開鑿こころ迄積の石のるいるいとあるのも戦後  
高と流れる白い雲と山の信號塔が三月

東松八洲雄

残雪に降る雨木の芽に降る雨傘さして往く  
骨髄のやうな並樹ももう海岸通り春のやうす

黒板へ凌波性と耐波性の講義が冬の落日  
しぐれてはしぐれの通る石のせた家ふるさと

淨心寺 淳

また失業者がふえるだらう手の蠅叩  
もう空襲はない淋しい空かな星月夜かな

裸で井戸堀る肩の汗が日ざかり  
月、祭の提灯が軒のきに淨心寺横町

堀 英之助

過去は言ふな日本の將來は烈日きびし  
さるすべりの番地はこのへん

土藏がぼつんとそこに三日月を見つけて焼跡  
月が欠けてゐる浪音が厄日近くて一の谷あたり

池田詩外樓

葉を吹く葉をうつ雨になると昏れてゐる  
たばこの火を借りて公孫樹の乳房が涼しい

鯨がひとつそれから釣れなくて青山白雲  
青柿落ちて汚れてゐて布團に起きてゐる病人

近木黎々火

机に横向いた屋根のいくつと赤土のかべと柿の芽ほぐれてゐる  
日が花に海戦の新聞朝々来る

山本木天夢

からだからあせがおちて雲のよい烟  
もどりは舟で月のあかるい四五人で

鈴木折嶺

寒あけの小松山のむかうが海である  
朝は朝日がいばらの赤い實に池のそばの道  
晝出て夜も警報がはいり雲のまげ目の星が冬

山々からりとばれて寒に入る電線山へゆく  
 小さき棺のふたうつことも夜のふすま  
 朝は地震のあとの朝日が青木の赤い實にさし  
 鐵砲放つ村に來て知るべの庭の樹にとるツウメ  
 それぞれ山が古郷はなつかし道もうれつて冬木の立つ  
 あかるくて湖の波月はれてある村が更けてる  
 朝から見えてる窓の富士時たま見てある一日晴れてる  
 敵襲おそれるではないが山寺はよるし蘇鐵は青し  
 雪へもどるころるすでに梅ひらきて熱海ほとり

諏訪にて二句

高橋良太郎

これは冬の山葵の青い葉のあるを賣るなり  
 冬の日あまればみづうみ凍りたり  
 月の夜にしるいけむりおいでとこまでも汽車の中  
 月があかるくて飛機でらし出されてさくれつする音が星  
 青い風は窓から入れて眞白な病床の花  
 半月の光りも梅雨どきの海はにぶ色の雨戸引く  
 陽を沈めてもまだ暮れない岬の松がこんにち夏至  
 梅雨の明け切らない朝のほのな松の匂ひ松の林  
 機影はもうない夕空の高と冬木の雲  
 空襲に明けて風もない空のけふが元日  
 凍る朝の血管へ入れる液の透明な青い空  
 またも枯木に新月のまだ便りなくて我が子  
 見るにつけ學徒兵の冬木に三日月我子の事

鴨外博士邸

寒空、燒跡は胸像ひとつ横むいてゐる

小川都影

青木青華

池原魚眠洞

人が來て立つてうつり春の日の湖の暮れてゆく  
 ゑんどうの花や暮れ方の海の方から雨  
 青葉、竿の雨たたいてすすぎものをあげる  
 夜に入つてからの雨で寝るころの大きな雨夏  
 私に机にさしてもらつてゐるつじ外におんなじつじ朝  
 警報解除のでふてふが暑いぜつちやう  
 ふるさと田を植ゑ終り月夜田の水こそはたつぶり  
 月夜とほいふれの音どの田も植ゑ終へてゐる  
 巖やゆふふだちばれてくる浪  
 月夜すずしい港のふね燈火管制  
 苗代苗が伸びる毎日の山の容ち  
 掌にして螢火のつめたきをばなつ  
 三日月、菜の花はきいろな  
 蛙なく、兵を送り英靈を迎え  
 道のべのつじを手にお墓は陽のある山のでつべん  
 氷の裂ける音の小鳥の足音の朝であり  
 かき餅の裏表返して此夜歴史の變轉を聞く  
 炭に燒かるる木の年輪が濡れて雪降る  
 青むころのその木の芽和へ物にして夕餉の時  
 母も在まさぬ此夏の父の日のいちはつ  
 柿の葉の落ちた葉で炊いてあたたかい味噌汁  
 まだおとす葉はもつてゐて柿の木雨ふる  
 寒い雲が月夜になる木のなかのたかい木  
 山は雪らしい晩の雨が海の松の木  
 きふ麥時き、少年けふ飛行兵願書もつてゆく

木村綠平

木戸夢郎

財馬阿步

田中井夢

水にも草にも君の顔にも月のある月夜  
 秋の日の暮外に焚く火のいろの好まし  
 在所川の流れののぼる鮭々こころに見えてなる  
 鴉が飛びなやむそら汽車の幕進してくる  
 われらは舟に土蔵と柿の木の實も暮れる  
 一握の炭炭斗にあり夜になる机とざぶとん  
 記念寫真にあるその人ひさしぶりにきて火鉢の火箸  
 雲水さん道のそこだけ杉の大樹冬日  
 配給の餅の平たい吾子の餅も一枚鯛も一匹  
 君も征く来て歸るとき字を書けと日の丸  
 残暑大瀬を渡り來しこの舟の舳  
 われ立つに川岸の木に鳴く蟬  
 尾根の墓域に秋彼岸大それの太陽  
 旅たまさか尾根は露ふかく昏るゝ  
 神馬藻ほす涓にたちて沙のところ  
 こぞつて藪地熾大徳寺納豆少許  
 九品九天じやがたらいもうすあか  
 すくつて藪の地めん不惜匂ひくる牛のからだ  
 われた穢荷の向ふ花つけたべんべん草  
 建ちかけた其家の山吹一株の八重  
 山に家あり家の前に人立つて桐の花  
 晩春こゝ農民の住めるみなばだし  
 夕日する世にふれつゝゆく一人の男が見える  
 うしろに來し曼珠沙華とほそい一筋みち  
 曼珠沙華へ朝の日さす曼珠沙華つらなり

大越 吾亦紅

伊東 俊二

岡本 影薫

西山 刀耕

堀川 屈人

淺野 麗木

胸のところまでとどく一本の葉鶏頭のそばにゐて私

妻コウ戦災死

秋夜そこにぼくのかげとぼくの身のまはり  
 この家の構へ裏庭が見えて葱の花  
 夏大根を掘る子供は小さきを一束  
 山羊と人とある草原のひろくて五月の山々

罹災一句

庭の馬鈴薯を掘り焦土にたちてたべる汁の實  
 こゝより奥は山脈都賀こほり霜解野しまま  
 吾れに茶を煮ると焚きくべて梨のずば枝の東  
 汽車山に登る柴山のにきはひ雪にうもれ住む人も  
 清水さす水田水口の雪解す葉せり生えて  
 杉ところどころ立つこの霧の朝羽前の國  
 この國の稔りこの國のをみなの子晴れて  
 秋鯖あがるといふおほき日本海風き  
 鮮々鯖一尾わたり蟹二つ提げてもみつ  
 伊吹けふ夏の山鏡を見せてはつきり夏の山鏡  
 人若きと行くに皆が新月に觸るゝ感じ  
 水嵩の谷川を越えるうすくらき虎杖に  
 草野傾斜を上るずつと低きに峰ありて見える  
 人ら出て山に道を開く裸ことごとく

悼臺水

垂るる南瓜の型變り窓間あるじ逝きませり  
 天をみつめる木を草をこの日八月一日  
 きふけふかも秋藥の芽いつ俯のまた

今川 溪花

渡部 嫁ヶ君

桔梗 谷 椋溪

若松 乙吉

朝倉 九鶴子

秋晴ればれ軽ろいばくおん梅の落葉しし  
雨マの満月をこころ足る思ひつくづく見入る  
男土手の青き踏む山々の雲  
春祭山 水音 立てたよゆ  
御本尊黒しと拜す木の芽冷ゆる時  
行々子堂うしる池のもつ水面  
夏の月うすし足をよくあらひ水音  
おほみこめり國の野は身にしげりなり  
庭の南瓜眞桑瓜そのほかに微塵も念頭にい  
しばし乗合ふバス涼しくて稻原  
一頭黒牛をりだぶついた體軀秋草を喰み

杉山元帥夫妻の死

秋雲のしろくひびきなき空にひやくものあり  
唐きびの毛の戦争がやんでからの飛行機  
南瓜抱いてあつい日のぬくみの子にも持たせ  
日があかるくて見えてある我がかぼちゃ

北信濃太田村二句

馬小屋から馬が顔出して戦争が終つた空  
草を刈る白い鎌を研いである水に  
夏山裏山富士のある方は青葉ばかり  
大根に花を咲かせて置く廊のそば日あたり  
そばのはなくれてから下りくる路が急な  
遠山もあめになる柿の木やしづく  
竹の伸びそろふ竹の節々雨になる  
戦敗れし大詔泣くにも炎天

宮林益村

南 晴 星

内 島 北 琅

秋 山 秋 紅 蓼

内 田 南 岬

心も病葉の一つ一つに降服の日が来た  
降服とはおのれを見出せない眞夏の空と地  
病む人の腦を病み乾坤となく眠る八月  
遺す言葉も言へぬ亡き人の八月午の下り  
萩なくなり齒朶あり水が流れたり山峽  
蟬捕る二人の兒童と自分とだけが在る杜の中  
水積んだとらつく山から来る觸れて青栗の枝を飛ばし  
桃を食へ響垂る指が節立ちちて人々  
日移り松葉牡丹翳るへ木立もる光線

信州桔梗が原にて

栗畑には山が雨後の遠くのうす青い山も  
いこへばひるむしのあはの味  
いくさがすんでしまへば青い空とあはの穂  
そばの花にみぞそばの咲きあふれる此の道  
ぶだうの匂して行くとぶだう摘む女達はたけ  
生きて修行をす秋の山彼方にあり  
日本の野菊日本の村落にてくにたみ  
芒の穂立つ身のぬくみを覺え  
われら日本のこの秋目のあぜみち  
障子を貼つてあるすがたあきらかにある  
粟の穂が二三穂をくづしてのむなしく  
母が兵科をほめるを一氣に穂をくづして  
きびの穂ば軒ばに山家のこゝに終戦のことども  
燈を明るうせよ今夜は中央が兄の座(復員)  
風の家をお精靈蜻蛉が通りぬけたかたへ垣穂

喜 谷 六 花

萩 原 井 泉 水

中 塚 一 碧 樓

西 垣 出 禪 子



# 新俳句論研考(八)

新俳句精神と寫實に就いて(2)

西垣 中禪子

## 新俳句律・純粹感情の意味表現

文學の自然主義とは、本來リアリズムによつて、現實を翻譯し、それによつて傳達模倣するもの(自然主義の文學)ではなく、作家の認識によるリアルな世界をつくる活動である。従つて、ここでは、却つて超自然的な方法にあるもので、即ち、超自然主義の文學は、超自然的現象を模倣するものであるのに對して、かかる方法としての超自然主義は、現實(事實)にとどまらない別なリアルをつくる文學的方法による世界の認識である。

されば、方法の超自然主義は、人間的なことを對象としないポエツイであるが、この意味は、ポエツイだけを目的とすることではなければならぬ。つまり、人間的でないといふことは、感情的でないといふことである。それは、純粹感情である「意味の表現」と云ふことである。従つて靈感的態度を希求するものでなく、知性の徹見であり、感覺の光度をみがく明晰への秩序の追求である。

ここでまた留意すべきことは、俳句の技術に於ける散文の使用が、ポエツイの目的に適ふ方法として散文を發見したことではあるが、この散文のリアリズムは、たとへポエツイの目的に適ふものとしても、かかる方法が單に先天的なものと考へる時は、自然主義方法論を一步も出るも

のではなく、そこでは、應々、超自然主義文學に陥るのである。ローマ主義文學の超自然主義思想を、そのまま自然に寫すリアリズムは、超自然主義文學の方法であるからである。

されば、我々は靈感的に或る一つの世界を發見すると云ふポエツイの態度ではなく、文字といふ媒材の秩序ある組合せにより、新らしい意味の世界を創造するもの、それが即ちリアリズムである。そして、俳句ポエツイ(俳句律)とはリアリテの創造であり、それは象徴性に他ならないのである。然しながら、この象徴性が——自然を讚美する自然作家は、それをありのままに傳へることによつて、それが自然そのものであるかの如く思惟するのであるが、描寫が描寫である以上、描寫の行爲者(作家)の認識に外ならぬことに我々は特に注意しやう——單に情調象徴が根本であるとして、思想に無關心である時は、それは、象徴主義の現實的な關係のみを見て、その價值を形成する目的に働いてゐるエステティックを見てゐないと云ふ通見に陥る。

かくて、情調象徴を根本とする象徴主義は象徴主義文學であつて、文學の象徴主義は、却つて主知の秩序に知覺をおく明晰な確信的なものであると云へる。

ここに於いて、方法の超自然主義がそのまま寫すと云ふ藝術性は五七・五と云ふ韻律の法則を目的に必要とばしないし、また、意味の文學が目的的に純粹化したことによつて、散文の發生も當然許されるものであるが、上述の自然の再現と描寫に終始し、想像を排し現實の簿記であることを目的とする自然主義文學の散文とは、全然目的を異にしなければならぬのである。我々は生命のリズムとしての律性を無視するものではないから、技術として、韻律の音樂性を主知的に利用し、意味を表白でなしに、暗示によつて示さんとする象徴に立つのである。

かかる境地に於ける韻文と散文とは、ポエジイのエステテイクとして同一の見地にあるもので、五・七・五の韻律法則から意味の獨立が散文詩俳句の展開であるとすれば、その意味は、必然的に「如何なる意味」であるかを證明するポエジイを必要とする。「如何なる意味」とは、必然的に韻文に盛られた意味が「如何なる意味」によつて、ポエジイであるかと云ふ意味のエステテイクと一致するのである。かかる「意味の意味」がない單に散文に書かれたものはまづたくの短文に過ぎぬものである。

かくして、我々の高次のポエジイ(絶對的生命把握の律意識とは、フォルムとして韻文或は散文を選ぶといふことに本質的な相違は持たないが、方法論として、單なる好みでは決してなく、目的として、ポエジイの方法のみを目的とするものみに妥當であるものである。目的としてポエジイを表現したものに於いては、如何なる意味が書かれてあるかの注意は當然で、いかなる方法によつて書かれてあるかに俳句の進化がある。即ち、如何なる方法によつて書かれてあるかがポエジイの問題であり、如何なる意味が書かれてあるかに文學の問題がある。

ポエジイとはその觀念(イデー)と形態との取扱ひに、即ち方法論の問題に屬し、ポエジイの立場からすれば、ポエジイは方法の規定であり、文學はその實驗である。従つて、方法の技術は自己自身に與へる根本經驗(根本體驗)であり、自己の反省形態(根源的統一)として自己の中から導き出すものであり、律性は、即ち構想力の論理である。

かくの如く、我々の立場の「ありのままを寫す」と云ふリアリズムは、反省的方法論のポエジイによる自己の自發的限定であり、感覺に於ける最初のものから出發して、眞にそれ自身、その働きの唯一に限定される現實に立つことである。そして、普通の散文藝術、即ち小説なぞは、出發點に於いてポエジイの方法を利用するが、文學として全然別の精神

活動を必要とし、ポエジイとは方向的に異なる目的に働く藝術活動であるのである。散文藝術はポエジイの文學的方法によつてスタイルを進化せしめる文學ではあるが、俳句の目的と小説の目的とは、勿論同一ならざることば當然であらねばならない。

### 俳句詩論の構成

以上によつて寫實論の二つのわなは、一つは客觀偏重論であり、他の一つは主觀偏重論であつた。前者は觀照的な唯物論へ通じ、後者は情緒的な觀念論にだし、結局模寫論を一步も出ないことが知れた。我らの認識ポエジイに就いては既に述べてあるから、課題を俳句の詩論構成へ移さう。

藝術も文學に關する限り、文學の個有の領域のなかになければならぬ。而して、各々個有の領域に於いては、ジャンルの相違によつて異つた「目的」と「方法」とを持つてあるから、價値に妥當する他の領域のものから「詩的なるもの」を、一つの獨自なものとして認める所に、形成的なものとしてのポエジイはある。これは、詩を形成し表現し、構成する精神である。反對に云へば、ポエジイを志向する作用として、「詩的なるもの」としての藝術的價値に妥當するものである。而して、この「詩的なるもの」なるポエジイを客觀的に規定するものは、「作品」であり、一つの「もの」である。従つて、「詩的なるもの」としてのポエジイなる主觀値に妥當する事が出来ない。

ここに、作者と作品の間に精神の状態が存在すると云ふ事、また、方法と云ふ物的なものが存在することを知らねばならぬ。で、今日俳句に於ける詩と云ふものが、何にを指すかと云へば、定型、基準律、自由律、

新日本俳句と云ふ如く、俳句とよばれるフアツンは常に異つてゐても、その根柢となる本質は同一の源泉に發して流れを作る活動力であり、即ち、詩の精神活動に屬する主知(自己の調和を完成せんとする意識)こそそれである。普通は本質としての詩を、形成的ポエジイと呼び、フアツンとして實際の作品となつて現はれるものをポエムと云ふのである。これは、形式に於いて實在するものであり、存在的ポエジイである。

上記の二つのポエジイがあるが、そのままに把握するア・ポステリオリの學として、詩論の可能があり、この根元をなすものが「詩史」である。この詩史は、一方に作品としてのポエジイを對象とするから、外的詩史であり、可能なるものは存在するものである爲に、見方は形式的である。他方、「詩的なるもの」としてのポエジイを對象とするものにあつては、形成的であるから妥當を跡づけるもので、即ち、藝術意欲から發足する内的詩史である。

この二つの詩史の可能によつて、俳句ポエジイの展開は跡づけられる。然しながら、そこにはこの二つの史的順位を認めることと、それぞれが對象としてとられるポエジイが「於いてある」ア・プリオリとしてのポエジイを豫想しなければならぬことを要する。この豫想なくしては詩史は學として不可能であつて、是非とも藝術學により基礎づけられていなければならぬ。

されば、このア・プリオリとしてのポエジイに依つて「詩論」も「詩學」も學として基礎づけられるものであり、價値の體系であるから、「詩的なるもの」の法則性に依つて考へられるものである。現象的に云へば、現實に存在してゐる俳句なるものは、一定の具體的内容をもつた生き生きとした藝術である。生き生きとした程特殊であり、事實存在するものは常に特殊藝術である。であるから、「詩史」はこの如き事實として、現

實に我々と相接してゐる個性的な具體的な藝術で、また、生き生きと變化發展する姿を、そのありのままに認識しやうとするものである。従つて、「詩史」は「特殊藝術學」の出發點なのである。さらに又、「現實性」と「具體性」とに於いて、特性たるただ「一回的なもの」、繰り返す事の出來ない生きた個性の把握以外に、「詩史」のとする領域は、一つの價値の世界がある。哲學的な思惟からは、價値の認識が與へられた現實の單純な模寫でないことは既に述べた所で、認識は事物を模寫することではなく、與へられてゐるのである。「與へられる」と云ふことは、要求すること、一つの選擇であり、體系化・組織化することである。従つて、「詩史」は單に現在あるままの具體的事實をそのまま記述するのではなく、認識することは一つの選擇で、その選擇原理と識別の標準とは、必ず「普遍妥當」性を有することに依つてゐなければならぬ。俳句詩論の「學」としての客觀性は、ここに要求せられるのである。

## 鎌倉雜記

荻原井泉水

土用のうちは雨天や曇天が多かつたが、八月に入つてからカン／＼照りとなつた。平時ならば鎌倉の海は大賑ひの季節で、私も海へ行くことを樂しみとするのだが、去年から海水浴禁止となつて、今年はや、海岸で鹽を作ることをしてゐるさうだ。由井の濱邊に鹽たくげぶり……なんといふのは、鎌倉時代にも見られぬ古風な感じだが、笑ふべきではない。人間は砂糖無くとも生きてゐられるが、鹽が無くては生存出來ない。

鹽の貴さといふものを、明治以後の日本人は、信玄と謙信との談で知つてゐるだけだったが、近頃はしみじみと是を體感してきたのだ。ツルゲエネフの「散文詩」の中に——或る百姓の寡婦の一人息子が死んだ。其の村の地主の奥さんが其女房の家へ悔みに行つた。と、其女房は、眞黒になつた鍋の底を傾けて薄いキャベツの汁をすくつて飲んでゐた。地主の奥様は驚いた。こんな大きな不幸の中で食べ残しの汁の仕末をしてゐるなんて、よくもそんな平氣な氣持になれたものだ……。奥様は云つた。「お前まア息子の事を思はずにゐられるのかえ？ どうして汁なんか食べてゐられるのだらうね！」女房は、涙を頬に流しながら小聲で答へた。「もう私も死んぢまひさうでござひます、でも此の汁は勿體なうござひます、これにはお鹽がはいつてをりますから。」ロシアの農民の氣持が今は日本でも解るやうになつたのである。

x

私は毎日、日盛り時に、芝生に變椅子を持出して、裸體になつて、日光浴をしてゐる。或日、心易い友人がずか／＼と庭にはいつて来て、これを見て驚いたらしく、「やあ、これは／＼」と云つた。私は「やあ、今能因法師をやつてあるところですよ」と云つた。——以下問答——「それは！さぞ名歌が出来たことでせうね」「出来たとも……」「聞きたいね」「都をば……といふのだ」「都をば……それから……」「ウーム、都をば疎開と共に出でしかど空襲しげき鎌倉の里……とはどうだい」「二人は阿々大笑したことである。

x

『風と共に去りぬ』は大衆小説ではあらうが、其中の人物の性格はそれ／＼に好く描かれてゐる。アシュレの妻、メラニイは人間としても、實にしつかりした人で、これほど好感をもてる婦人は少い。「墓地美協會」

と「裁縫協會」との婦人會員の間に論争が起つた。戦争だ散華した味方（南軍）の墓の草をいくら取つても、其傍にあるヤンキイ（北軍）の墓が草茫々としてゐるのでは何にもならない、ヤンキイの墓の雜草をも抜くべきだといふ説と、ヤンキイの墓の草をぬくぞは以ての外だといふ説との對抗であつた、婦人連は眞赤になつて喚き合つた。メラニイは「みなさん！ お願ひですわ」と云つて、いきり立つ婦人連の中にやつと自分の聲をひびかせた。自分は敵軍の墓から雜草をむしるだけでなく、花を植ゑてやらなければいけないと思ふと云つた。みんなは前よりも、もつと高い聲で騒ぎ出した。しかも今度ば兩派が一つになつて口々に云つた。「ヤンキイの墓に！まあ、メラニイ、あなたは、よくもまアそんなことが出来たものね」「あいつらがチャールス（メラニイの兄）を殺したんぢやないの……」自分はヤンキイの墓をあげてやりたい位だといふ者すらあつた。メラニイは此の嵐の中で訴へるやうに叫んだ。

「おまみなさん……どうぞおしまひまで云はせて下さいまし！ 私がこの問題に口を出さ資格がないのは、私自身よく知つてゐます。私の身寄り死んだのは、チャールスだけなんですものね、その上私には有難いことにチャールスの葬つてある所が解つてゐます。でも、今ここにゐらつしやる方々の中には、御自分の息子さんや、旦那様や、兄弟の方が、どこに埋められてゐるか、御存知ない方が多勢あらつしやいますわ、そして……その方たちのお墓も、ヤンキイのお墓がこちらにあるのと同じに、ヤンキイの國のどこかにあるのですわ。あゝ、もしヤンキイの女が、その方たちのお墓をあげてやるなんかと云つたとしたら、どんなに恐ろしいことでせうか……でも、もし優しいヤンキイの女が——ヤンキイの女の中にだつて優しい人はきつとあると思ひますわもし其人たちが、私達南軍兵士のお墓から雜草を抜いて、

お花をあげてくれたとしましたら、たとへ敵といひながら、私達にとつてどんなにうれしいことでせう！ チャールズが北部で死んだとしまして、もし誰かごさうしてくれたと知りましたら、私きつと慰められると思ひますわ——私、みなさんにどう思はれても仕方ございませぬ、そして——見つかり次第、ヤンキイのお墓から、雑草を抜きます、そしてお花を植ゑてやります。」

少し長すぎたが、是は「話」としても「好い話」だと思ふので、メモとして書いておく。此の談の兩協會の婦人達が最後には愛の饗宴に心を馳け込ましたことは云ふまでもない。

私は花が何よりも好きだが、花を作ることはちと面倒だ。菊作りの談を聞くと、寒の内に土の手入からはじまるが、其肥料の或種の取扱ひも花の樂しみを思へばきたないのなぞとは考へないと云ふ。なるほど其程にしてこそ本統の丹精の甲斐があるのだらう。菊作り汝は菊の奴かな——と笑はれる所に、會心の微笑もあらう。だが、私のやうなものぐさには出來ない。で、凡そ手がからず、又手をかける必要もない朝顔だけが、私にも作れるものなのだ。これも近頃は、鉢がないので、露地に作る。竹や簀を立てたりすればいゝのだが、それすら面倒なので、垣根や立木に這はせる、芝生の上にごかに這はせる。たゞ、世話といつては朝夕に水を灌ぐことだけだ。そんな風に投げやりにして於いても、種がいゝ爲だらう、ずいぶん大輪の美しい花が咲く。今朝は、どんな色が咲いたかと思ふのが樂しみだ。花は盡までには凋む、いかにも果敢ないものだが、一體、花の命といふものはそれでいゝもので、命の短いことにこそ花のあはれさ、美しさはあるのだと思ふ。

x

メエテがマッセルマンに語つた言葉の中に、朝顔といふものは、秋の末になつても、まだ蔓を先へ先へと伸ばしてゆく、生ひ先の少いのに、間口ばかり擴げてどうする氣かさういふ風な老いて無分別な人間もよくあるといふ意味(大體)の一節がある。これは、私達も頂門の一針として聽かなくてはならぬことだが、日本の朝顔は、よく見ると、最初に咲いた花から一つ一つ實になつてゆくので、其點では無分別のことはない。三宅正太郎氏の隨筆に——朝顔の蔓が日毎に延びて手近に鈍るものを探すが、眼のない悲しさには、暗中摸索といふ風に徒に空間をなでまはしてゐる。で、時にはたよりのある方へ蔓をひつづつて来て、からみよいうやうに助けてやつたりする。だが、人が手で其を助けないとしても、結局は、どの蔓もどうか安住の地を見つけて、要するに大した無駄もなかつたらしく、自然はいつも極めて冷靜で、正常なのだ、といふ感想がある。成程とおもつたので、大分以前に讀んだものだが、覚えてゐる。

## 隨 感

内 田 南 艸

俳句が敘事詩であるか、抒情詩であるかに就て、長谷川是如閑氏は、嘗つて俳句研究の誌上にて「俳句は抒情的敘事詩である」と説明してゐたやうに記憶する。之の説には、私も同感であるが、何故俳句が抒情的敘事詩であるかといふと、俳句は現實の把握と、之がもたらす主情とを最短詩型の中に包含してゐるからに外ならない。俳句の世界に於ては、短歌のやうに、自己の感概をそのまゝ、直ちに吐露することがない。必ら

ずある一つの具體的事實に基礎を置いて、情を抒べるのであつて、感情が句の表より、句の裏に秘められてゐるのである。俳句が短歌に比較して、より内省的であり、靜觀的であり、敘事的である所以である。例へば、芭蕉の「古池」の句にしても、單に、古池に蛙が飛び込んだだけの事實ではない。古池に無限の愛響を感じて、そこに醸し出された自然現象と、之に陶酔せるものの心の一元化された實相觀入の寫生詩であつて、句の表には、自然現象のみを詠つてあるが、尙心をその奥に秘めてゐるのである。即ち飽く迄も現實の把握の上に立脚した感動の表現であつて、俳句が抒情的敘事詩であるといふことを立證してゐる。

戦前のリアリズム流行時代には、俳句は「即物詩なり」として、現實を餘りに尊重した結果、遂に報告文學の領域を一步も出ることなく、俳句の奥行と香氣とを失つた。俳句の世界と、科學の世界とは、自ら別個のものであつて、藝術に於ては、現實は如何に克明に描いても所詮事實の報告に過ぎない。

この意味からして、詩を敘事詩とか、抒情詩とかに區別することが、はたして當を得てゐるかは疑はしい。

芭蕉の言葉に「俳諧は上手に嘘をいふなり」といふ言葉があつたやうに記憶するが、これは俳句が單に事件の報告、寫生であつてはならぬ、現實飛躍の創造的精神がなくてはならぬことを云つてゐるのである。即ち、俳句の主情性を強調してゐるのであつて、詩人の逞しい想像を比喻した言葉に過ぎない。

例へば

落日草冷し、草握らん

蘿 月

の句は、實際に、草が冷いか、どうかは分らぬが、落日を浴びてゐる草が冷く感じられたのであつて、この感じ、この想像こそ詩人の尊い感

情である。

最近、俳人の傾向は、一般的に主知的になつて、ものゝ觀察をおろそかにしないが、反面詩人としての鋭い感動性が衰へたやうに思ふ。即ち詩は、知るのではなく、歌ふのである。物に感じて、情的となり、想像的となつて、その美化した感動を歌ふのである。じつくり藝術三昧境にひたつて、靜かに物を沈思してゐるのもよいが、眞つ赤に空を焦がした夕日を見ていたゞわけもなく手を叩いて喜ぶ子供のやうな心も欲しいものである。俳句の現實主義は、物の觀察力の養成には、大いに役立つが、詩の根本は詩人の鋭い感受性にあることを銘記すべきである。現實を忘れ、現實から遊離した想像は、何んの價値もない幻想に過ぎないが、現實にしっかりと根を下して、ものの情を抒べる俳句は、測り知れない底力のあるものである。

大東亞戦争も幾多苦難の中に、突如として戦争終結の大詔が下された。而もそれは我々の夢想もしなかつた敗北の決戦である。今が今まで、不敗の信念で戦つて来た我々にとつて、泣くに泣かれぬ冷徹な現實である。戦敗國の例として、國民は自暴自棄に陥り、廢類的となり勝ちであるが、我々俳人は、この悲しい現實から立ち立つて、日本再建の爲に、雄健、素朴、高雅、清純、明朗等の情緒を昂揚しようぢやないか。

## 距離

西 東 八 十 八

俳句を作りはじめ、肺氣にも俳壇といふものに關心をもちはじめると

俳壇には二つの流れがあるやうに思ふものである。所謂定型と、私達の「俳句」とである。そして、その二つの流れは永遠に交はることなき平行線のやうに思ふか、或ひは、一つの點から分岐して左右へ別れた流れのやうに思ふか、のやうである。だが實は、——しかし、いふまでもなく——流れは一つなのである。この一筋の俳句なのである。たゞ、その一筋を前進してゐるものと、そのあとをついてくるものとのすぎない。

私は最近、管見に入つた一例を以て、定型と私達の俳句との距離と深度とを實測してみることにしよう。

私は最近二年の間、私として出来る限り現代の俳句に關する書を涉獵し、私獨自の方法によつて其實體を極めることに努力しつゞけて來た。そして、私は、定型と私達の俳句との距離を三十年と見ざるを得ない結論に到達した。しかも、現在の定型の遅々たる、前進速度を以てしては三十年は三百年といふことも出來るときへ思ふのである。なぜなら、芭蕉を起點とも考へずに、却つて芭蕉への逆行をさへ企圖してゐる所をみると(而も其の逆行も亦夢想に終つてゐる!)三百年は往後六百年かも知れない。いや、その間に我々は今より一層の驀進を續けるであらうから、今日私が遠慮して三十年といふのも、實は六百年であるところをみると、現状の速力でも十年後には四十年とは云へず、むしろ千年の距離をつつてしまふのではなからうか。いささか言ひ過ぎの如くであつて定型の人々には憤慨を買ひさうであるが、事實は次の一例によつてもお氣の毒なこととなるのである。

(斷つて置くが、御希望とあらば私は百數十例を擧げることが出来るまでになつてゐるし、その各例のどれかに該當するといふ想定からこの論を進めるならば、私は例を數へるの煩に堪へないであらう。こゝでは唯一例を示すにとどめる。)

俳誌「雲母」四月號の「春夏秋冬」欄の卷頭の句は次の如くである。盧心、先づ舌頭に轉じて味はつて頂かう。

香る花 香らぬ花に日脚のぶ

起美女

緒て、如何。諸君は、然し、私にこの句の評價を示されなくともよろしい。私は、この推薦者たる飯田蛇笏氏が、同誌の「現代の秀作を觀る」に、この一句を抜いて、何といはれてゐるかを聽いて欲しいのである。

……作者は「天津花園」を経營する主婦である。最早温室をとり出された色さまざまの鉢花が店舗の花壇に並べられてゐる。玻璃と鐵筋とによつて造られた建築物の内て顧客に接しつゞけてゐると、日一日、日脚が伸び所謂春暖遅日の感じが深くなつてゆく、事實、色とりどりの鉢花として香り高い花もあれば美しくても香りは感じない花もある。その何れもが萬遍なく日光を浴びる眼前のすがたは玩賞の心へ滲透するとともに又五體へ滲透することをこぼみたい。これほど痛切にひびく賞感といふものは割合稀である。作者に於ける賞感はこの場合直ちに讀者の鑑賞にのり移つて寸毫の隙をあらしめない。それほどに直截である。

……なほ、意をとむべき點は「香る花」と「香らぬ花」とを對照せしめた機微な具象的表現の効果で、さりふれた骨套手段の照を脱したところにある。明るい内に深みと手堅さを持つ秀作といふべきであらう。

蛇笏氏は昨年、井泉水先生が十七音前後の句を發表された時「俳句研究」一鶴の兩誌上に於て、あたかも先生が定型復歸の態勢を示されたかの如く錯覺されて、定型が我が國古來の傳統であるとの觀點から、層雲の崩壞が目前に現顯したかのやうに、説かれたことがある。私は當時、定型作家の定型そのものへの執着のげしさに救ひ難き或る思ひを抱いたのであつた。まことに定型作家といふものは、その定型と季語との約束に、囚はるゝ快感を味はつてゐるのであつて、第一に、その約束、そ

して次に内容——詩想へ觀入しようといふ顛倒を、何の反省もすることなく、よくも、何十年と句作し續けられるものだと、なかば感心もし、なかば、あきれもされるのである。

尤も、定型の中には伊東月草氏の如き方もあり、其著(傳統俳句精神)の中で季語に對する疑問と、五七五が俳句ではない所以とを論ぜられてゐるが、なほ、その氏にして私達の一句一律に迄、到らうとされてゐないのは、かなしいことである。

所で、さきに引用した蛇笏氏の評であるが、私が傍點した數言に對する私の解答は極めて簡單である。大正六年十二月刊行の屑雲句集「生命の木」の中から、それにふさはしい一句を探り來ればよい。次の句は如何。

刈田刈らぬ田此朝は松に霧濃けれ 紫 洋

季語「日脚伸ぶ」に、たよりすぎた前掲の秀作と、「此朝は松に霧濃けれ」との深度を比較されたい。或ひば「刈田刈らぬ田」といふ具象的な表現と「香の花香らぬ花」といふ觀念的な表現との、私達に訴へてくる力の強弱を思つてみれば、もう何もしないであらう。

それに「……………」といふやうな對照的な表現効果を獨創發見したものは屑雲であり、その追究は今日もなほ、續けられてゐるところであることは云ふまでもあるまい。そして、それが名詞對照から形容詞、動詞とますます廣くその範圍を擴め、その觀入の深度を深めて來てゐることを知つてゐる。

俳句といふ道の先登をゆくものと、それから三十年を低廻し、そこから、辛うじて一步出たか出ないかの、距離にして三十年の後方を、いまもなほ、ぶらりぶらりと來ようとしてゐるものと、一句一例を擧げても、こんなに明瞭に云ひ得るのである。

## 指針を記す(二〇)

中塚一碧樓

二坪あまり山葵の青の時雨る山家へ 關口比呂志

如何にも詩情豊かな一句である。山葵の青へ時雨るゝ事よるしく、又二坪あまりといふ事その山葵の青をぐつと明かに浮き出したやうに判然とさしてゐる。このところ幾坪でもいいやうなものゝ、うは行かないありま廣くもない二坪あまりといふのが丁度に情を誘ふやうであり、殊に「あまり」と云ふ柔か味もこの際に恰好の思ひであり、恰好の言葉であるやうに思へる。たゞ「……青の時雨る……」といふ「の」の一字の働きの一寸引つかゝる處があると思へる。と云つて「青き」では固くて、下への迂りも面白くないし、「青い」でもいけない。やはり「青の」と置くべきであらうが猶推蔽の餘地はあると思へる。

春の日ささん常の顔で唄によつて 渡邊まき子

素直で誠に樂な句である。何のわだかまりもなくすらくと云つてあつて、一つの心持がかなり明かに表はされてゐる。「さんさん」といふ表現が僕ら老人には一寸強過ぎるやうに感じられるが、かうした處は、句を作へ人句を見る人の年齢に據つて大いに異つた感じを持つてあらう事は無論である。唄によつて此人、常の顔であり、さうして所謂平常心の澄んだ氣持にあるであらう。

句末の「よつて」の調子もまことに樂である。



## 栗の皮よりか胡桃の皮ふるさと 田邊慶風

ふるさとに就いての感懐は随分昔から、さうして甚だ廣く詩に歌に句にも詠じられてゐる事であるが、無論それが故に古いといふ事はなく、それが故に一般的であるとのみは云へない。かうした句は何時の時代までも、いづこの大達にも多く試みられる事であらう。要は「ふるさと」の一句として存立の價あるかどうかと云ふ事である。

此句「栗の皮よりは胡桃の皮」とは放膽に云ひ切つたものである。栗の皮も甚だしいのであるが、胡桃の皮は一入にふるさとの情を深うするのである。と同時に栗の皮や胡桃の皮や、さうしたものが一緒になつて山村家郷の情が自らに感じられる、そこに句の妙、言葉の妙があるやうに覺える。

此句、更に「栗の皮よりは胡桃の皮」と云ふ言葉へむかに「ふるさと」と言つた處も大膽な手法でありこの打切坊のやうな處至つて賛成である。

## 池へ雪残り釣する人のうしろを通り 今川溪花

行きずりに屢々かうした場所をよく通る事ではあるが、此作者はそれを如何にも明かに感じ、確かに意識してゐる。

ところどころに雪が残つてゐる情景の中に釣人のうしろの方を靜かな心持で通つて行く作者のつゝまじやかな姿が目に見えるやうであり、作者の人柄さへ思はれるほどに感じる。

## 何か鳥がないてゐた夏の日今日にごつた湖の水 谷しんいち

## 夏日閑情。

これは作者が會遊の諏訪へ、友たちを訪れた時の一句なのであるが、閑情それが何とも鮮かに表現されてゐる。

「何か鳥がないてゐた」といふ思ひは實に素直であり、如何にもありのままそのまゝを云つてゐると思へる。「にごつた湖の水」といふのも景を生き／＼と表はしてゐていゝ。

水の澄切つた湖のしづかきよりも僕には此句のもつ「にごつた湖の水」のしづかきの方に強く引きつけられるのである。

## 細い繩を張り日あたりへ籠の若布ほす夫婦 宮本夕漁子

珍しい句材ではないが、「細い繩を張り」といふ所からか、妙に情趣を誘ふ一句であり、この夫婦はいかにも佳き夫婦であらう事が思へる。

表現の上で、「籠の」は軽く入つてゐるやうであるが、この「籠の」は一句を自然と確かなものとしてゐる點を注意したいと思ふ。假に「……日あたりへ若布ほす夫婦」としても大體にその様子は判るのであるが、それは一通り判ると云ふに過ぎない。「籠の若布」といふに據つて始めて明確に表現し得たといふべきであらう。

## 春めく人群のいきれも愉しき通勤 今井六石

通勤の苦しき乃至通勤の愉しきも凡そ知らない僕ではあるが、此句の愉しい氣持にはハタと打たれたのであつた。通勤の經驗は無くとも心持がこゝまで來るとよく通ずるのである。

「春めく」といふ事が、多少とも句の後半へひびき過ぎるやう感じられて、こゝはたゞに「早春」といふ風にありたく思ふのであるが、どうであらうか。

僕は此句によつて一つの珍しい氣持に接し得たやうに感じたのであつた。

窯を焚く夜となり雪の屋根屋根 内島 北琅

ひたぶるに窯を焚く人、しづかなる心に窯を焚いてゐる陶工、もの靜かな心持が「雪の屋根屋根」といふ表現によつて鮮かに出てゐると思ふ。表現にも少しのゆるみもなく、少しの餘剩も無くして甚だ結構である。同作者の句に「窯の屋根の雪とける一人火を焚く」といふのがある。これもよく徹る佳句と思ふのであるが、前句に比して一寸派手であり、「一人」といふ言ひ方など微かながら表現の不滿が感じられる。前句の方が地味であつて好ましく、句の格も前句の方がずつと高いものであると思はれるのである。

## 句 評

福島 一思、照井 稗人

内島 北琅

炭焼きやめてけふ種播きの日あたる水 松 原 彌々々

「一思」すべてが農村風景である。そして健實の裡に風趣掬すべきものがある。炭焼きと、種播きとが穉かに融合されてゐるのもいふし、日あたる水とはつきり把握してゐるところに詩心の躍動がある。戦前、戦後を通じて素朴な日本農村の姿である。

「北琅」炭焼やめてはおいてとでも云つてもらいたいものです。最後の水は何かコブのやうに邪魔になる。作者は日あたる水の氣分がよかつたのだとあれば、種を播く事と日のあつてゐる水面の輝きとで充分俳句境にひたる事が出来やう。果して炭焼やめてがどれほどの働きを有す

るであらうか。

雲たくましく朝々つるの花實になつてゆく 宇野 彥 録

「一思」雲と地上の花と照合したところに一句の壯嚴さが自ら感じられるやうな句である。表現の用語として「雲たくましく」は些かぶしつけなところがないでもないが、かういつたところに荒削りな面白味がない。表現は思ふに實に難しい、少し行過ぎれば露けになるし、引込めれば何を言つてゐるか分らなくなる。つるの花のぼかし方と、雲のたくましくと、これはこのまゝに止めて置く句かもしれない。

「稗人」よい句だと思つた。然しよく見ると焦り氣味で句になつたやうに思はれる。

「つるの花實になつてゆく」「つるの花」「實になつてゆく」では如何にしても私にはうなづくことは出来ない。といふのは私の到らぬ考へと思ひ過しかも知れないが、丸でつるの花が實になつてゆくやうに、その言葉使ひだけで解るやうで解らない自己暗示的完全さも失墜してゐるやうに思はざるを得ない。

勿論、この句の骨組は立派であるが、雲のたくましさで對しての作者の感覺が幼稚である。といふことは一口に言へば即興的戲作と言ふのである。

或ひは單純なのかも知れない。峰のやうに立上る雲としか思はれない情景に對しつるの花實になつてゆくとは貧弱であらう。何のつるの花なのかもはつきりしないし、一概に「つるの花實になつてゆく」の言葉がこの句の生命を奪つたも同じであるまいか。

「朝々」を「毎毎」としてみたらどうか。「つるの花實になつてゆく」は百八十度轉回して新構想を試みたら如何。

この句から受ける感動は餘りにも強烈な「曇たくましく」からだけで、何となくばさばさした句である。

〔北瑛〕この句として曇たくましくはやゝ強過ぎるうらみがある。朝々つるの花が實になるなどいかにもつまましくやかな細かい味ひが出てゐるものに比して、作者はもつと靜觀に徹したら、たまらなくうるはしい句になると思ふ。多くの俳人は、自然に浮氣過ぎるのである。

物さげて戻れば隣りの庭草が見ゆる炎天 高橋 一

〔一思〕一句軽い、都會生活者のその如く、日常生活の一斷面を輕快に捉へて讀つてあるところに淡い共感を持つ。物さげて戻れば——何の物とも云つてゐないが、これでもよいのだらう、家録氏の「つるの花」と共に多少僕には氣にかゝるのだが。

〔禪人〕隣の庭草が見ゆる炎天では、如何にしても言葉の羅列に感ずる。「見ゆる」が單に苦しまぎれの言ひ放し方で心に迫るものを感じないのが缺點、「が」で見ゆるがなくなると解るのであるまいか。一句の感情が「見ゆる」に込め或ひは「炎天」にもあるやうで何か漠然としてゐる。「物さげて戻れば」が下の句によつて生きてゐるかどうかも問題だと思ふ。と言ふのは「見ゆる」が庭草と炎天を遲緩し動きのない言葉とした。作者の眼に見ゆるは心へのレンズであつて「見ゆる」で言ひ度いことも言はないうのが俳句の能動性といふものである。この句は心で見ゆるのでなくて眼に見ゆるだけで、これが危険性の散漫で終るのは必狀。だから心のレンズ、詩は如何なる感覺を以て、となる。

〔物さげて戻れば〕（隣の庭草が見ゆる）（炎天）を心へのレンズに、焦點はどこに合せたらいいかといふことである。この句の持つ作者の氣持は到つて自然であり、骨組と情景はわかるといふ程度である。

氣持の自然そのまゝに表現することが句作道に於ていちばん大切な事は云ふ迄もないが、この句には、自然そのまゝが推敲を、さびそくされてゐると見ても致方ないと思ふ。

〔北瑛〕炎天と置いた所ちと常套的な感がある。然し物さげて戻ればと云ふ飾り氣のない一節がかなり働いてゐる。隣の庭草であるが故に甚だ面白い。全體として相當に好意のもてる句だと思ふ。

月のおちかけの雞に雞の和すいちめんの雪 松本 十返花

〔一思〕こん度の句評の中で僕には一番難物の句だつた。それだけ讀み應へもあり、考へ方も十分にさせられた。月のおちかけのも難かしいし、雞に雞の和すも、更に敍景のいちめんの雪も大道具であり過ぎる、それでゐてどれにも情の率かされるのを覺える。本當は、どの情味にも十分味到しかれる僕の視野の狭さが災ひしあるのかもしてれない。僕の感情のまゝに言はして貰ふなら、月のおちかけのは御馳走であり過ぎる、雞に雞の和すはかうした情景に一段と濃厚になるのかどうかしらぬが出来るならさうでなくて欲しい。

月のおちかけの雞に雞の和す——ならいちめんの雪でなくて他の情景であつて欲しい。要するにいづれもが息ぐるしいまでの張り詰めた情景であり、そしてその何れもが好個の詩的要素をもつが故に、一句として讀み下す場合どれが中心やら混沌として分り兼ね、従つて一句の心を十分味到し兼ねる缺點をもつと僕には思考されるのである。

〔北瑛〕この句には何の申分もない、實にうまい句だと賞讃するのみである。おちかけも佳し、和すも佳し、然していちめんの雪はたまらなく適切なものをつかんだ。あまりにたくましく美しい。

背の兒に昔の山や川みせて泣かす橋をゆく 佐々木石々

「一思」一句何となく面白い、殊に「泣かさず橋をゆく」あたりはドラマチックな句なまへ感じる。頭髮を手拭で束ね、冷飯草履を履いた子守女に空の三ヶ月さま、無論そんな情景ではないが、そんな勝手な想像さへ湧く、この場合「昔の」は依然からありのまゝの位の意味であらう。「昔の」が出て来たところに意味が判然せぬところもあるが、山や川と並べたところも多少氣にかゝる。

「北琅」上半句はなかなか結構だが、泣かさずはどんなものか。そこに句の生命がありさうでその命が鼻につく。假に泣かさずを助けるとするならば私は橋を行くの橋を捨ててであらう。橋は山川に對して月並的な説明になると思ふ。この句のタクミは「昔の」にある。この二字によつて句は相當に複雑化し、泣かさずによつて親の氣持をよく出しては居る。

鶯が啼く木の向ふにも木々ある朝 山原 徹風

「一思」木の向ふにも木々ある、が一句のやまである。そしてある人はこれを妙な表現としてとらう。又一步踏込んだ面白い傾向として見る向もあるかも知れない。僕は後者の方への傾向をもつ。たゞこゝで問題となるのは「朝」だ、木々ある——の働きへいきなり朝と据置かれるのは些か唐突な感じがなくもない。朝の氣持は十分よいのだが、ここをなんとかもう少し推敲して貰ひたかつた。

「北琅」この句はうまい。最後の朝がよくすはつてゐる。完璧に近い句だと思ふ。別に新鮮なれらひでも表現でもないが、迫るものは澁刺たるものがある。山の向ふにも山がある等といふ句は我々は見飽いてゐたのに、この句はさらに心をとらへる。それはまさに朝にある。

## 選句録

碧樓選

山崎多加士

富岡敏

相澤華芳

山田蒲公英

工場去る日の桐の葉おちて来ない青い  
秋の花咲くそれはそれとして人々  
草の實を見るいま機械が人が動かす  
しつかり子をかゝへ草のおとろへ  
くもり日の落葉二三まいある掃かうか  
罹災の人からすでに秋の繪と文きたり  
こゝろどよめき炎天の鹽はまを稼ぐ  
釋然灯をあかるくすなごりの團扇  
銀いろの紙魚多し八月休戦を堪へて  
工場休戦時間きつちりの夏干潟  
淺春橋を渡り見えてゐる大きな山  
工場大きく迫り来るかたち或夜春の夜  
しづかに潮が寄りよるとき春來し巖  
雜木みどりの林へそこへますぐ近づく  
男鹿山から夏めく舳ひくし浪ひくし  
子雀鳴くへ首向けひとりのことども  
春の日罹災證明書を持ちて來し大きな男  
梅を漬けし壺を鹽をていねいにしまふ

残響の屋根の傾き屋根を葺きつゞける男  
 大きな南瓜を抱へし家に入る女の人  
 父に付添ひて來しふるさとの山裾の草ふみ  
 道のさくらんぼたべるにもう日のかげり山國  
 初夏家うち板の間が廣く父と並んで坐り  
 夏の日叔父の使ふ農具土間にひかりて  
 日々田の草を取る叔母と今夜枕をならべ  
 んんどうができて天まんなかへ日がくる  
 働いて食ふものゝ鎌あたらしい鱗を見る  
 一つ一八がひらき出勤の時刻  
 日のいろ日ぐれ花の一八と在り  
 はつ夏のかぜひるからになりて  
 一筋野のみち草から牛が顔上げる  
 かく生きてあり夏野に吾亦紅を知る  
 獸坐の人々に木槿の花がうごかないこの豔  
 塚を取り毀つ人々に豆の葉の茂り  
 農女が腰太く家に一本木の茂り  
 雲うごき川べり若い黍の穂たち  
 木槿に近寄り木槿の花見てある人  
 復貞四五日纏ち若くて枝豆を食つてある  
 湯の菱の實の話する爐邊時折明りす  
 一途にしつかりした稻架を作る跣足のおやち  
 稻穂出たところが見える暑さで人が通る  
 松にかこまれ彼等のキャンパが張られた穂草ある  
 霞倒ふ家のさやまんどうがなり川が流れる

## 星野武夫

## 三國屋自省

## 武居泊雨川

## 中村亂水

## 吉澤稻市

水門の水音の印象す霧がこい木槿咲く  
 鼻の先をばつたが飛ぶ戦争のことを忘れましよう  
 秋の草の白い花驛員出て見る草  
 部屋のものもの女の部屋の小もの夏の日  
 庭のものと起き伏し七日の向日葵の花  
 いづかたもふるさとの空虎杖の花  
 斯くて大きい山その夜を蚊帳にいれる  
 牛を飼ふて地に確に住みこゝに枯野の子供  
 子供乳を含み山が薄く明ける父母が雑炊  
 山が明けて馬に臭ひがあり我等が生きる存在  
 幼きものに皇土あり地に水があり草生え  
 山に這入る栗すこし拾ひ父に子に地の巖  
 眞向へば波音のたしかにこの夜泊れり  
 天光まことにひそみこの家海に臨めり  
 井戸があり向日葵があり朝雇傭人と話す  
 島山はつきり目にし戻つてなる蚊の聲  
 突端の家から人出で、潮しぶき炎天  
 敗戦第何日女ずあきの皮をむいてある  
 家に煙をたて、秋山を襟林を思ふ日々  
 小燕の種を蒔く日ときめて彼岸過ぎての彼女  
 糸瓜忌と云ふに咲いた糸瓜の花と一日  
 いちにちを親子われらに夏草原なる凸凹  
 一連貨車みんな馬鈴薯うごきだしたばかり夏夜  
 胡麻畑それから青豆畑さうした空の雲なし  
 霞の茂りみな立つて動かないわが立つてうごかない

## 渡部冬三

## 川島南海城

## 梶田羊介

## 龍田眞魚

## 石田鳴子

秋朝このひと時茶をのみてをり男日本人  
 子供と一列にあゆむみち草々穂にたち  
 茶をつぐ音ありて秋朝の霧ながれ入り  
 蕎麥の芽あかし秋朝の氣持おほきく呼吸す  
 稻の穂がかしいのである田の畦にて話す  
 この時蟬時雨戸口から出てくる小母さん  
 草々花ざかり山をはなれない男  
 夜の家の中人見えて風を入れてあるすだれ  
 桔梗咲くつきつきに咲くつばみ國土  
 唐黍たべるさうした父の厚い革帶  
 穂薄にそこ下野境青空  
 母と子川原來て眞上の青い穂粟  
 八月の日の道の小石やわが影や  
 眞晝なり地を打ちて胡桃一つ落ちたり  
 戸口に近き朴の若木の茂りを言ふ  
 若荷いくつかあり田圃小景を描き  
 部屋にこゝろをおく暮し郭公が鳴く  
 獨住む草に見なれぬ硝子器があるものを入れて  
 雨落ちさう田も人もみな働かぬ田を植  
 焦土から來て一面植田なり皇土  
 稻を早刈りす漣おさまらない川面  
 ばつた高くとぶ脛にふれる穂草の穂  
 あかまんま咲き少女と沖の黒雲  
 穂草ゆれて地を打つつゞいて走る男の子  
 漏水はれば國土の空青い釣をする

後藤零丁子

山田不雪郎

渡部湘雨

伊藤彌太

沼文生

三雲城東

相場汀石

あけびあるを見た藪の夜となる  
 工事川一涸れてくる積の漣  
 烏瓜の花白い生籬を感じ生涯  
 矢車草ぞんぶんの花一つの家こゝの家  
 やうやくみるものトマト青い實となりし  
 日も目も地のしめつてこゝに蟹をりあした  
 すかんぼにふるゝ朝の日に立ちたり  
 曲りて打ち込む釘春宵のわれ  
 墨の匂ひを春は病の灯を思ふ  
 胡葱少しを土にいけておくこの日頃  
 いまれんげ田を見てゐるに行く雲  
 日中川が一すち麻剝く納屋ぐち  
 庭木を鶏がくぐる朝から暑い家うち  
 日没湯のあかり霞切うすれゆくこゝろ  
 人のゆきゝ道のべの小麥は刈りどき  
 山に近い道 薊伸びきつてゐる  
 行々子鳴く方に工員つれ川の流るゝ  
 鋼材磨く机邊ばらの花ゆれ  
 火煙りをぬいて出た父母子の胡瓜畑  
 馬鈴薯白い花この朝ふるさとの土  
 紫陽花開ききらないをしり家にある  
 すこし熱れ氣味も交つてゐる梅の實籠にあける  
 田に水乏しく一日田を植うる人ら  
 いのちありて母子に柿の實は木に青し  
 大詔かしこみ母子に竹のみどりなるあり

鈴木邸石

日田朴也

金子曙山

藤田三六亭

永井はるを

加々美絹子

ひくよて爆音ひびき溝深くたでの花咲く  
 朝の地に立つわが子と野菊の花とうごかない  
 俄に集會 風なき夏の夜 全員  
 小川の岸の菟麻倒れ空晴れたるに  
 桐の木茂れる葉をつけ切られし枝々  
 草を引く日庭木の松の葉のびるにまかせ  
 野蒜のみどりに立ちわがこゝろさまよふ  
 きびしく山火移るを見てゐるのみ波のさよなみ  
 ちかく水雞が鳴き霞むらに水のうごき  
 家ををりけふ茄子をきざんで喰ふなとこ  
 梅雨晴馬のからだ洗ふに人も馬も黙す  
 煙草畑に向つて腰を下し人等語る事しげし  
 少年でんく虫をり 麥秋 國土  
 ふろしきに虎杖ののびたるを包み汗ばみ  
 芝生に手洗の水ながす近々と春山の容  
 山つゝし胸の高さで咲いて少女達  
 郭公なく若葉がつゞき山裾がひろく  
 稻の葉に照りつけ人ら黙々山から歸る日  
 けふよき日のすゞかけの木芍薬はまるい苔  
 野茨の花よこたはる赤牛のづうたい  
 咲いてしろじろ一八の夜があけた  
 水あさくながれ若葉さら／＼小鳥ゑて  
 霧流るゝ胡桃の青實房々見ゆる  
 蘊草の光りと半身不随のからだこの日  
 箱の鮎秋の色なり顔を寄する

菅 木 葉

佐藤 禾 黄

新 田 巢 州

御所 窪 けまじ

牧 野 秋 風 嶺

秋 元 櫻 水

海光る草光る村の朝鳥 賊白し  
 朝きまつてゆくひとびと家の軒燕繚り  
 あら草なか蛇苺花を持つてゐるけふ  
 あが頭髮短く庭くま羊齒の若葉  
 石々の隙ありてひまの種萌え立ち  
 或る一夜を眠る鬣は繭をつくる音  
 霧晴るゝ山この草の荷が牛に曳かれる  
 欄干のない橋が木炭自動車を走らす秋照り  
 神前額の一句葉を散らす樹あり  
 いくさをばり英靈とともにあるく秋草の徑  
 この小松原去りがたくをり秋雨ふり  
 こゝに大根うつくしく生えわれらが朝  
 こどもみんな稻を刈り復員の人々来る  
 炎天水蜜桃ひろげて賣つてをり  
 黄い泥水へもぐる子あり土堤の薬家  
 しやべり合ふて水碓うつ泉あるところ  
 銀河滄くひろこり街樹揺れれど  
 朝を山が盛り上りもの陰の山樞子の花  
 ラグビー選手といふ君のトマト苗植ゑて朝を  
 住むにひとつ家のいくつもの家族胡瓜花咲けり  
 カンナ伸びびてる點呼の鐘が暮れて  
 雨の日吾子に夏帽子を買ひ来て母親  
 麥熟れてよるこひ家にて吾子らが育つ  
 吾子をいだいてをり／＼桐の花地へ落ちる  
 あれの山羊鳴きし野茨の花さきし

佐藤 裕 山人

泉 大 晁

松 原 颯 々

伴 野 龍

打 田 金 牛

宮 本 夕 漁 子

松の花粉を肩に枯枝少しばかり抱いて来た子  
 除草はかどり女達憩ふ畦草日さし  
 女郎花揺るゝ野のあちら白雲うごく空  
 鶏ら樹下により炎日の庭へ水撒く男  
 空廣し黍の畑に黍の穂を切る  
 男炭竈に火を入れ朝は山影  
 聖恩上にあり耕して夏山の裾  
 黍畑とそれから星空を想ふ眠る  
 秋の雲はつきりあれば療養所の遠い建物  
 隣人と親しみトマト青い實のしたしみ  
 蝶がたかくもとぶふるさとへ来てゐる  
 きふの空けふの空トマトは赤くうれる  
 夏布圍ことしかるくからだに慣れる  
 槻 大樹 六月 太 / 陽 あ が り  
 麥秋の人あり日さすに祈り  
 芍薬の花さきし空大いなり  
 藪寺藪にうづまりて初夏の雨ふり  
 岩かわききつて眞蓋岩に若葉のかけ  
 藪中一軒家ありなにか若葉の一樹  
 夏至近き日射し藪にふかぶかと射す  
 山のみもとと峽田は露おりにゆく人々  
 小さい手ににぎられ小鮎は水に放たれて夏の日  
 みづうみちかくあるかんじ秋めく一家みんなばらから  
 みんな私の干物で秋になる日にある

井上星樹

中川尙三

島林庄作

鹽野谷西呂

平井青三

中恒三郎

春曉の山なみ近く幕舎のけむり  
 別れ霜の草々光ありて野面明ける  
 畑打らゐて畑の焚火の音す  
 丸大根を蒔くこゝら畑土緒土  
 このことしかと身に庭畑に大根を蒔く  
 飛行機低く飛び葉雞頭の色に見入るわれ  
 無花果たべてしまつたその木の下  
 みち潮橋の高さまでの舳に降つてゐる小さめ  
 疲れ退勤路さるすべりの花咲く道  
 お盆 近い草むらで 山羊で  
 日が照り日がくもり草地の蛇莓  
 少女谷間の水を飲み虎杖しげり  
 松葉牡丹紅に黄にあつい海からの風  
 けふ大漁燕が低う飛んでば走る  
 島の夏の日を妻と子と干して藻草  
 太い煙突と空と夏の日の畑  
 蕎麥を蒔くことにしてからのうねの幅  
 苗をまつすぐにうゑる水に田に入る  
 無電正調一人ゐて星が若葉が匂  
 葎田返し來し少女が靴の芹  
 水速し早春水ひかるを打ち童兒ら  
 殘暑牛の顔に刈草を擲ぐ  
 流れ水細い石ありて乾き秋陽とおもふ  
 いなたばなつけてきたいへかげのあるひと日

大淵青榮

伊藤秋蘿

佐藤かめ雄

高橋安榮

瀧浪龍雄

吉田五安

工藤抱擁子

二壺舎



二百十日晴天どこかで水を汲む音がする  
二百二十日五分作の田面陽が當りある  
これの空蟬おびたゞしこれの浄土

聖斷を拜し樹上の蟬高きを仰ぎ  
友が來て春夜の狭き部屋にて對坐久しう  
けふ晴れけふ日が暮れる菜種畑のつゞき

山おりてかへる暮れかけし頃の月見る  
汗にじむ秋暑きけふの雲高く  
葱苗が育つ雲が低う走り

親と子と綱をうけて田から水出て行く  
まびき菜大河で洗ふ夕日にむかひ  
蓼の花の溝を畦道をゆく

魚突く人二三人聲高き丸木橋の近くを  
この日山の學校こゝ職員室のだりあ  
地に窪に蟻が暑さ加はり

朝の月は山に浮いて流れぬ大氣  
菜畑に入りて小犬も走り來る夏朝  
一人は爐火に寄りて春寒きないふのみ

もの言はずある南瓜棚を見てある  
枝を切り拂ひ土用芽立つ庭木大きく  
雨降る猫柳はほゞ川舟繫ぎあるまゝ

池のほとり小孩あて菱の實一面に青く  
草取した一日暮れるときの鳥  
南瓜の花が濡れてゆれて雲のゆく朝

井上佐久良

下平天耳

石井多津巳

八木茶凡水

二宮秋歌樓

蓬萊智子

保田重藏

丸山白水

徳光梧郎

高野奇山樓

渡部東迷路

田代白雲  
和泉鷺人  
蓮屋枯苑  
雨宮一夫  
永井虹舟

出禪子選

夜は青白い果の花の房明けてある  
葱零落ちしよ風鈴の影

濁り江にごま鱧鼻浮きした  
柿の葉のやはらかさも晴れやかな朝空

梨畑明るみに山近き家々  
比處から原になる路で薄雪を一人行つた足痕

母を見て來た心弛びのステイム匂ふ夜行車  
人を交へぬ宵の爐べの茶碗の茶が冷え

酒食喫まぬ父の一生でこの柿の接木  
櫓低う栖むで冬めく障子母者よ

坂登りつめた老人の表情から何かを學ぼうとする年  
ゐざるはゐるよりも青空が酸いやうで湖畔

山に鳥鳴くとば橋來ての意念、木縁へ越ゆ  
ななかまど紅き實りをそと目にす

谿は石、草、我、生命、あの水  
朝晩に見る冬木のかわりやう

蕎麥の花白う呼びつ呼ばれつ行つてしまふ兒  
日曜客あればこの朝柿をもぐに数ぞへる

秋の學童欲しげにまだまだうれぬ柿  
いちぢくふくらみもせで學童の睨睛るる

手花火のうすらあかりに花のともしき螢ぐさ  
亡り憂秋の子供達來てゐる綿頭巾して

鈴木梅宇人

中村久重

早川昇

松金指月堂

佐藤鳴風子

瞳の高さへ征く人の盃あげてその瞳すんでゐた  
水を貫ふ赤まんまの塀にそふていくたびとなく  
すかし讀む夕刊汗の退勤者もくもくととして  
秋の海見ええて二三句作る幸

照井稗人

二三句宿の重い布圍で秋の雨  
とんぼばばれて山々柿あかかく  
山はれて光る尾花の嫁ります雁渡ります  
秋風南瓜粥にも入齒音させて母  
秋空ひろうなつた山何も言ふことなくて  
明るう灯ともし互にだまりこくつてゐる  
地にふして握る草なりはかなくて  
その日の青空は互にみつめられ

櫛田東谷

この土祖國の土なる草かきむしる  
出禪子あごに髯ありて蓋がくさらさら雨  
その日その日のメラで讀む日のつまるペン皿  
朝々紫苑のよう咲く體温表にかく  
どうやら夏も終つた鴉の夫婦でどこかへいく  
手柄話といふほどでもないリリリンと鳴く  
雪の峰晴れ遠き谷低き水音聞こゆ  
陽は暮れかかる岸をゆく川を越す鳥  
木は伐りつくし一面の山肌穂草に立つ風  
森林霧につつまれて青き草穂の中に鳴く虫  
朝露に黒き土踏む峽の山鳥遠く啼く  
うす青い空より嵐す常盤木三月  
積雪の憂さばらし二十日月夜頃を

宇野豕籙

伊藤柳江

稻垣一鳴

けふまひるぞに早しきさらぎの映ゆる雲  
ほ陽雪ふれば常盤木いゆく何鳥  
けふもけふ雪若者顔をつつみ

遺稿

茶巾茶賣佃煮もよしいつもの酒量  
南瓜の苗を床から拔き取つたあとその儘で  
誰に齧つた七歩の詩萬らか此の子豆蒔くに  
疎開して來て夷齊もなかう葡汁  
なりふりおごそ後る鉢巻凜と締めた感(孫來る)  
一兵とてゐなく一望のうち垂穂なる  
ひがん花山へしんぶんのきてはがきがくる  
向ひ山のひだとひだほつと月の出るところ  
復員の吾子ふたりと芋粥に月出てくる  
山のいもの味を一つ一つ月のぼりつつ  
庭に立ち門に立ち陽射し障子のわが家さらば(疎開)  
牛の影地に東風吹くを疎開の荷を積む  
疎開けふしげし椽先わが影荷物と  
結疾く澄み澄み底へ木影わが影  
疎開つれづれ直な街道燕突つ飛びぬ  
櫻の感傷を去りたい秋の櫻落葉ぞ  
共に語れば若き生命秋櫻落葉  
心おほらか山の落葉の音をきく  
雜草軒下の人となりて空の明るし  
眼に秋空の染み疎開地の朝飼の煙  
栗いまでも落ちぬ嵐の過ぎし朝

井出臺水

森林五

久野仙雨

吉沼晴穂

横山空華

世がまれてをり岸のみづ引き草の小さい花  
 敗戦の街中に今月も戦車ゆく夏の日  
 玉葱おなじやうに吊られおなじ家がづらり出来て  
 風今年を涼しう萬葉の夢を残して松枯れ  
 牧草原に一すぢの道ありゆるやかに  
 白樺芽ぶかぜ白く寒く五月  
 雪谿の雪波なし一つ一つ花さかす植物  
 雜草にむすばれし身をなけすつ高原  
 庭に四十雀今朝はまた來ぬ  
 朝の鴉屋根にゐる  
 人と歸るや鴉ゆく空  
 驟雨が去つた鷄舎の屋根あかるい夜  
 やがての朝目わらくつづまる朝の深雪で  
 心すましアカザ摘んで秋  
 暗幕とつて素直に生きやふと長い夜  
 光り身に添へり木々の芽  
 郭公としてしづかなる温泉邑  
 あの門に辛夷咲きわが居ひなぐもり  
 われた草鞋をかけてひっそり山家昏れた  
 花もなにかと忙しく散つてゆくので  
 この秋雨の裕着てゐる  
 あくまで素直なきみのわれに向ふ向日葵  
 増産の夫婦で子があり鳥おどしの落日  
 野分の夜人が途絶へた靴の音す  
 水筒水の音する冬の夜

加藤迷々可

佐藤厚吉

加賀谷灰人

河地みやこ

大森古天

佐藤大峯

山口健介

川津鏡太郎

圖書館上施肥まく人見え枯木  
 學齡おませさんでも女の兒は女  
 老爺暴君ぶり土筆のはかま  
 鮎の那珂川コップに映る晚酌今昔  
 雪原くろくる望樓あるかまへ飛行雲流れ  
 雪残る軒近か大和鶴來つなく雨細し  
 松宮をおほひ妻子のやすらかな夏陽さけ  
 父と呼ばれなにななづま汗をふく  
 可愛いモン、秋の夜空に旅立つて子ら  
 疎開の子何も知らない子供でなくなつて旅立つて行く  
 自家製馬鈴薯粗末にならぬぞふうふう雑炊  
 新佛この朝木槿の花を供へる  
 傘持たぬ子がしくしく泣いてる雨の風仙花  
 われわれにか、ゆめ夢のつづきか現實の此の  
 荒夢眼閉つ朝夕の車窓花も咲きぬしが  
 電燈に覆が垂れ覆のうら赤い夏夕  
 よはひを重れし母が腰のあたり今宵  
 町の月夜に詠まれてゐる屋根の月にして  
 夕は夕で綠林へ消え犬を訓練する男  
 朱唇を思ひ灯の色京の町はくれてゐる  
 重れた袂のおもい春の京の町で  
 屋上にまだ話聲して月は落ちた  
 あれこれ盡きぬ話の膝に日のいりつき  
 彈丸の跡はばきぎへ晝顔からみ咲き  
 たうもろこしの葉大きく揺すれ白雨

南畝三坡

安藤北冠星

波邊舒生

倉持茂

米山銀河

内藤風竹

朝田一九

大島蕻花

高橋長太郎

池田房代

吉池良子

降松春風

伴野龍

かほちや花を競ひ疎開の子ら朝を朝な  
 潮風庭の茂みにそよぎぼんぼん船歸へる  
 掌に落穂秋雨にぬれて山で別れる  
 汗こそみづ穂み國蕎麥の高原花盛  
 露を駒背で花蕎麥駒鞭ち早め  
 水たまり澄みまだ乾かぬ敷石の山茶花  
 柿をむく妻間借ぐらしの物など買うて  
 洗濯日の子供がさわめきお山は晴天  
 二度を牛が啼き牛小屋の葉鶏頭眞紅  
 公園に来て花を忘れた青い衣の表情  
 牛車荷嵩に稻積んでくる道の一筋  
 夏は留守にした箱植のトマトたくまし  
 夕焼けて水面に片がばは菱藻よるまま  
 舟にでる舟虫を追ひながら舟のおにぎり  
 セメント會社の煙突が水平線の静かな港町で  
 夕陽へ赤蜻蛉飛び交ふ松の色が黒い  
 瀬音背に麥を刈り内務工事は進んで  
 雲が湯屋の屋根からぼんに夕立かかり  
 潮の香に鉄打つ音の汽笛はるかの海に  
 百舌一聲二聲窓の氣刺して去る病床  
 陽は栗林を斜めこども釣竿を忘れてくる  
 氣にするから餘計に吃る百舌の高鳴き  
 トマトうれしく夕風の蚊を追ひながら  
 草つ原風の吹く月見草が立つ夜  
 あかう夕づく雲の峰のしかかる藤棚

福永友一  
 鈴木長司  
 池上耕山  
 高内千代子  
 大野藤四郎  
 萩原アツ子  
 八木三女  
 坂爪幸々  
 佐藤吟雨  
 渡邊良之  
 海谷新三  
 渡邊まき子  
 白藤旅人  
 牛尾紀代子  
 谷地畝志郷  
 淺野ミツ子  
 秋吉秀一郎  
 丸濱誠坊  
 藤下ふさ  
 渡邊如蘭  
 牛尾紀代子  
 佐藤清一  
 古川直三



井 泉 水 選

つまのなまへとわたしのなまへとてがみがなほり  
 月が出た左墓標の線右トーチカの線、雪原監視して  
 いつかは骨になを覆をなでて雪ふかい兵舎のうち  
 屋根の雪にならべて氷らしてある柿のいろかな  
 この雪景色の彼方から流れてくる×の起床喇叭だ  
 星、中學生が二階と二階の灯で話してゐる  
 しちりんひのきえたあとのくうきあなくてほしのでるまで  
 霧のやはらかな子の手をひいてゆく  
 たのしくおぼばこ其他露まみれなるのをあらく  
 木苺、わき水は雲をこどもの顔をうつしなり  
 松の林と月まるし村の建設の構想なんど  
 何といつても今ははつきり敗けたことをつつくほうし  
 新しい時代は此子らよ虫鳴く子の寝顔にて  
 枝豆、これから失業が多くならう談の盆の殻  
 萩の花、渡し舟が着くと暮に間もなく  
 多肉植物の青い冬です女の紅い口紅です  
 遮断機が牛の鼻とめてある雪の露士です  
 夜るに干してあるのも雲が白い療養所、月夜  
 工場へも學校へもこの道風が麥が青んできた  
 すこしは快くて歩いてきた富士につくしのあるところ  
 管制してまるい灯火燧は四人ではいる

松本千返花  
 平松 屋 童  
 水谷 青 史  
 瀧山 重 三  
 皆川 蓼 二

塵も乏しきを漬物石のおもたきよ  
 しづかにぶりかさむ雪から征でたつ君の眉  
 きけば長いことしの風邪の此頃一日遅れの新聞  
 乏しさに耐えて日々明りとりまど一つ揺る  
 ふと、硫黄燐寸の火となるまでの空虚  
 働きにゆく群集となつてホームのぐんぐん同じ群集の急行が通る  
 姉ではない顔が貯水池の一度湯になつた水の中  
 ふるさとかからだやすめにきてつゆに在るあめ  
 富士がすそからくれてゆくれんげのはたけ  
 芽ぶかない木にもしづかなあめ  
 あめの音だけの静かさばひるいへやにひとり  
 四月のほこりのながでわかれたひとのたよりが  
 池をあるいてゐるとあるいてゐる人に逢うて涼しい  
 蟬がとほくでなく朝が曇つて松の涼しと見ゆる  
 父と私と同じ工へ辨當はあたたかく  
 月夜あるいてほそみち細い橋がある  
 いちめんさいいてぬれてゐるよ  
 星がありつたけの寒さになるよ  
 山鳩山がひとつひとつ明るくなるよ  
 夜が霧のある月のえだ豆  
 膳のものに蠅が二三びき坐つておまつりしてゐる  
 土に種まくもの土に芽を出すものこの春  
 日本を裏と表にして日本海月冨ゆる  
 巻脚胖まき直して郭公なげびるからの仕事  
 たらひ一つおいて春のきてゐる川

上野 忠三

津田 笹彦

櫻田 輝郎

松村 頑久

菅崎 道雄

水車を廻す水の、或ひは巖に咲く花の、流れゆく  
 月へ芽ぶいてゐる樹が月夜となる枝さしかはし  
 月よは、つばきの木の葉と水の流れるよ  
 かけひの水に竹のひしやくがある月夜の雲が通る  
 はしけは最終の郵便物を、沖の虹が船のそば  
 島は井戸の小蝦があがつて来た口を激ぐ  
 仔馬この頃の値の赤い入蔭喚べてゐる故里  
 没り日の濤が涼しくなつてゐる巖で釣れてゐる  
 夏雲と教會の窓の色硝子にあるオランダ船の繪  
 暮れないうちから出てゐる月が竹やぶ梅雨明け  
 つゆの陽がさせは少し波立つてゐる棧橋の脚  
 日の永いさかりの月がある線路みちまつすぐ勤めの戻り  
 遺髪一握りの軽さを手にとりてあり夏の日  
 その中の一つの星が弟であるやうな天の河はら  
 おほみこころ戦火をさまり蓮の花の端麗  
 降伏の日の、ごまばたけごまばたいて泣いてゐたとよ  
 ぶだうのふさ採つてゐる娘さんです秋の光線です  
 月夜、お茶盆を縁側へ出して月の糸瓜の花で  
 屋根のへちまの花も海も月夜となつたいま  
 あめの降る川のしづかな雨を山吹の花は散る  
 遠雷のやうな、監視員と楠の芽の赤いのを言ふ  
 雨に濡れて、枳殻が咲いてゐる垣根  
 いちじくの青い芽、草ひいた足の裏洗うてゐる  
 花が濡れてゐる雨にあしの芽が濡れてゐる  
 あら壁月になるあらうみをまへ

村田 白鷗

名雪 理輝

栃木 よし雄

武田 桂

里井 正子

くさの中月見草くさのながなかれてゐる  
えんどうかごにつんであなはいあめにぬれてゐるえんどう

征く旗があるると一二軒はある村のやれ草さいてゐる

日永のそれでもくれてくる一本の青いくるみの木

雪が消えればさへづり山の上にも耕地がある

日が出るど近い丘の雪遠山の雪の學校教練

甘藷苗三百本は植ゑてきたうちの病人起きられてゐる

町並と云つても田から出てくる水に萬蒲さいてゐる

燕こしも來て馬屋の上馬は朝出て夕戻つてくる

紙袋つげたりんご畑に月が明るいふたりである

おむすび喰べてしまつた旅も終りの梅干の種

障子はりかへてこぶり咲く村がおまつり

火の山をうしろ青葉の湯はしづかにしてぬるし

霧の夜、鈴蘭の白い鈴遠い人へ押花にする

朝日あちらの山にさしこちらの畑にさし正月元日

樺四五本冬芽をもち朝の東横映畫劇場

桐畑には桐の木桑畑には桑の木月が通つてゆく晚

火の見る西日がつらなをまたとかしてゐる宿屋の看板

月がこれからでる山のかたち雪の下の水音

日南へ出してある牛、と白い鶏

そろそろ木の芽が、炭焼さんは煙管でのむ

ながいうちにちが暮れてすこし動く桐の葉

縁先に待宵草咲かせて益良夫わが子を待つ

菌田三不止

佐藤龍

植田市籠

佐藤專子

植ゑをへて濡れたもの着換へると本降りになる

鳥居のそばに狐の白い夏の夜明けてゐる

實頭にはまだ早いさくらも女學校のベルがなりませ

雨が寒ンに入る木のかげの一軒、灯ともる

毛糸の玉のしづかにほぐれてゆく雪夜となる

穂に出て月の、あかるい湖のほとりの道へでる道

春は濃蝸がないたり花が咲いたり躊躇してゐる

月がつきよとなる蚊帳の外のためこ盆

白いものの暑いほどな白雲

月にも花の散つてゐる田螺が鳴いてゐる

やまを夏にしてやまの雨

遠山の雪彼岸寒う麥に肥する

兵を送りて日の丸が一入日田植一入日

シヤガ芋植ゑる穴夕月となり風一寸寒く

黍の穂近くて山が遠くて遙かな思ひで

月夜の日蔭にも黍の穂馬追が鳴いてゐる

夕べは止んで葵の花零するほどな

夜つよい風となつて隣のギスちよんとないてる

寒明もあと二三日の鶏が午つげてゐる

麥の芽ひさかたぶりの好い雨音である

明るい月夜の煙が大晦日の風呂たいてゐる

竹藪、今年は蕎麥の花を咲かせ大井川流れてゐる

百舌の初音の高鳴きの松に日の登り來

佐藤逸仙子

栗栖ひろよし

森田十雨

青應香

平岡國次郎

撫も乏しきを漬物石のおもたさまよ  
しづかにぶりかさむ雪から征でたつ君の眉  
きけば長いことしの風邪の此頃一日遅れの新聞  
乏しさに耐えて日々明りとりまど一つ掘る  
ふと、硫黄燐寸の火となるまでの空虚  
上野 忠三  
働きにゆく群集となつてホームのぐんぐん同じ群集の急行が通る

姉ではない顔が貯水池の一度湯になつた水の中  
ふるさからだやすめにきてつゆに在るあめ  
富士がすそからくれてゆくれんげのぼたけ  
芽ぶかない木にもしづかなあめ  
津田 笹彦

あめの音だけの静かさはひろいへやにひとり  
四月のほこりのながでわかれたひとのたよりが無い  
池をあるいてゐるとあるいてゐる人に逢うて涼しい  
蟬がとほくでなく朝が曇つて松の涼しと見ゆる  
櫻 田 輝 郎  
父と私と同じ工へ辨當はあたたかく  
月夜あるいてほそみち細い橋がある  
いちめんさいいてぬれてゐるよ

星がありつたけの寒さになるよ  
山鳩山がひとつひとつ明るくなるよ  
夜が霧のある月のえだ豆  
松村 禎久  
膳のものに蠅が二三びき坐つておまつりしてゐる  
土に種まくも土に芽を出すものこの春

日本を裏と表にして日本海月冴ゆる  
巻脚牌まき直して郭公なけばひるからの仕事  
たらひ一つおいて春のきてゐる川  
菅崎 道雄

水車を廻す水の、或ひは巖に咲く花の、流れゆく  
月へ芽ぶいてゐる樹が月夜となる枝さしかはし  
月よは、つばきの木の葉と水の流れるよ  
かけひの水に竹のひしやくがある月夜の曇が通る  
はしけは最終の郵便物を、沖の虹が船のそば  
村 田 白 鶴  
島は井戸の小堰があがつて来た口を激ぐ  
仔馬この頃の値の赤い人蔘喰べてゐる故里  
没り日の濤が涼しくなつてゐる巖で釣れてゐる  
夏雲と教會の窓の色硝子にあるオランダ船の繪

暮れないうちから出てゐる月が竹やぶ梅雨明け  
つゆの陽がさせば少し波立つてゐる棧橋の脚  
日の永いさかりの月がある線路をちまつすぐ勤めを戻り  
名 雪 理 輝  
遺髪一握りの軽さを手にとりてあり夏の日  
その中の一つの星が弟であるやうな天の河はら  
おほみこころ戦火をさまり蓮の花の端麗  
柄木 よし 雄

降伏の日の、ごまばたけごまはたいて泣いてゐたとよ  
ぶだうのふさ探つてゐる娘さんです秋の光線です  
月夜、お茶盆を縁側へ出して月の糸瓜の花で  
屋根のへちまの花も海も月夜となつたいま  
あめの降る川のしづかな雨を山吹の花は散る  
武 田 桂  
遠雷のやうな、監視員と楠の芽の赤いのを言ふ  
雨に濡れて枳殻が咲いてゐる垣根  
いちじくの青い芽、草ひいた足の裏洗うてゐる  
花が濡れてゐる雨にあしの芽が濡れてゐる  
あら壁月になるあらうみをまへ  
里 井 正 子

あら壁月になるあらうみをまへ  
里 井 正 子

くさの中月見草くさのながなかれてゐる  
えんどうかごにつんであなひあめにぬれてゐるえんどう

狂く旗があると一二軒はある村のやれ草さいてゐる

日永のそれでもくれてくる一本の青いくるみの木

雪が消えればさへづり山の上にも耕地がある

菌田三不止

日が出るど近い丘の雪遠山の雪の學校教練

甘藷苗三百本は植えてきたうちの病人起きられてゐる

町並と云つても田から出てくる水に葛蒲さいてゐる

燕としも来て馬屋の上馬は朝出て夕戻つてくる

佐藤龍

紙袋ついたりんご畑に月が明るいふたりである

おむすび喰べてしまつた旅も終りの梅干の種

障子はりかへてこぶり咲く村がおまつり

火の山をうしろ青葉の湯はしづかにしてぬるし

霧の夜、鈴蘭の白い鈴遠い人へ押花にする

植田市籠

朝日あちらの山にさしこちらの畑にさし正月元日

樺四五本冬芽をもち朝の東横映畫劇場

桐畑には桐の木桑畑には桑の木月が通つてゆく晩

火の見の西日がつらなをまだとかしてゐる宿屋の看板

月がこれからでる山のかたち雪の下の水音

佐藤専子

日南へ出してある牛、と白い鶏

そろそろ木の芽が、炭焼さんは煙管でのむ

ながいいちにちが暮れてすこし動く桐の葉

縁先に待草草咲かせて益良夫わが子を待つ

植ゑをへて濡れたもの着換へると本降りになる

鳥居のそばに狐の白い夏の夜明けてゐる

實頭にはまた早いさくらも女學校のベルがなります

雨が寒ンに入る木のかげの一軒、灯ともる

毛糸の玉のしづかにほぐれてゆく雪夜となる

穂に出て月の、あかるい湖のほとりの道へでる道

春は淺蜩がないたり花が咲いたり歸還してゐる

月がつきよとなる蚊帳の外のため盆

白いものの暑いほどな白雲

月にも花の散つてゐる田螺が鳴いてゐる

やまを夏にしてやまの雨

遠山の雪彼岸寒う麥に肥する

兵を送りて日の丸が一入日田植一入日

シヤガ芋植ゑる穴夕月となり風一寸寒く

黍の穂近くて山が遠くて遙かな思ひで

月夜の日蔭にも黍の穂馬追が鳴いてゐる

夕べは止んで葵の花零するほどな

夜つよい風となつて隣のギスちよんとないてる

寒明もあと二三日の鶏が午つけてゐる

麥の芽ひさかたぶりの好い雨音である

明るい月夜の煙が大晦日の風呂たいである

竹藪、今年ば蕎麥の花を咲かせ大井川流れてゐる

百舌の初音の高鳴きの松に日の登り來

佐藤逸仙子

栗栖ひろよし

森田十雨

青應香

平岡國次郎



一人の氣狂ひに子供大ぜい其中まんじゆしやげ持つ子

朝は海からボンボン舟のボンボンと笛のある木  
暮れて三つの花の一莖の月見草に宿りある

春淺い水音の池のぐるりの木々

南川 鴻亮

霜、犬が野の道ををゆく

梅がほほけ時のひろげて行く傘

梅見に行つてきて此所にも梅が咲いてある

月ばかりの明るい月夜のうらぼんの太鼓

散つてしまつて麥の畑にそつた塀内の梅の木、雨

朝は製材する音と栗の花の匂ひと家のうら白いにはと

明け易く草原草の穂明けてなる

岡田 琅玕

雲のうへ走る雲の中はしる月がきびの穂

枯木に鳥がゐて安い宿屋の機どいつたやうな

ことしも青葉にホトトギスなく夕日壯嚴

空襲日ましにじげくてことしのきうりの味

便りをまてど、南瓜の花にまだ梅の残つてある

かなかなかなかな、青田の遠くまでかげつてゆく

暑かつた、月夜の日まわりの花の向きむき

きびしく葉がさる窓の光る雲夏去ぬる

もう一生逢へぬと思ふ遠いつくつくほうし

胡麻の花は下から咲いてゆく夏が秋になる

かなかながないてしまふと人が通るこゝ朝である

すこし露に濡れた石のなかに鳴いてゐる

遠藤 源治

増村 辰郎

焚火背にして麥畑雪が残り

小田 島義

今朝は水もとけて足が一本で鶴

こどもお婆さんとわたしの汽車を見てゐる蜜柑の木がある

千大根が白いそのほうへ道が月になつてゐる

日が少し伸びたかと思ふ枝々の尖の日

鯉の背に雨のふつてゐるおまつり

野に灯がともれてからの暮れそめてゐる

ひとむら秋海棠のはなれて二株三株さいとる

うみなりのはりまぜびようぶ

鳶の晴らした空と山とそのふもとの町

鳥が木の實を食べに来る硝子戸の中の私

小石蹴つては遊ぶ少女たち梅の二三りん

雪つけて別れに来てくれたさらに雪ふる

窓に白い雲を見る我が血の沈下速度を見る

昏れても散つてくる花びらが疎開あとの菜畑

たべられる草つんできてほしてある三時の報道

草の花雨上りの星がぬれてゐるような

ふつたりやんだりのかぼちやのつる

秋をばれつるべのある古里の家にかへつてゐる

草は實を蒔は花つけて城跡荒るるがままで

朝は雨あがりのトマトが赤くなつて聖書の輪讀

海にっいばむ鳴がまだ白くておちついた夕暮にする

秋ふる雨につながれてさう

佐伯 美則

高崎 貞之

宇佐 美一步

三浦 清一

浅井 冠二

てぶくろに五本の指いれる不幸な人を見てゐたと  
 思ふ、鮮人町はお葬式が出てゆく赤い裳青い裳  
 いつてしまふと、町に兵隊が来ると町も山も雪  
 療養の後はいかに生きることのつくつくぼうし  
 夕月、少し風あるもろこしのはな  
 赤いトマトをもいでゐる療院は静かな西日  
 風が涼しい患者として畑の草をとる  
 よしずから西日の旗が氷屋さん  
 夕月の、入れてからつぼらしい音のホスト  
 あらしのあとの秋日和で豆の配給がある  
 とんぼが水をたたいゑると目を驚して雲のゆく  
 雪の下、の英靈拜んだり、旅する  
 すつかり落葉してしまふと煙草屋の赤い看板  
 大きな神木に小さなおやしる、それがおまつり  
 小さい子ばかり二列歌つてゆく木蓮の花  
 防火用水にも水を満たして襷まんかい  
 青葉の雨の少しあかるくなつてこの遺報隊とゆく  
 牛がくる牛が鳴くつくしんぼ  
 ならんてゆけば春の連  
 空へ海へ征かせて白い紅い椿が咲く  
 月に山あり雪に道あり川千鳥飛ぶや  
 雪から南天の實廊から馬が顔出して空  
 土橋を渡ると茨の赤い賞消えのこる雪で

中西國友

青空へきりきりしやんと鳴かせてせんたく  
 水平線とずうつと電線歩いて旅が秋  
 去年の蛟遺線香ですといふて茶を入れて戦争の談も  
 罹災してお世話になつて萩の花さく  
 兵隊さん手も振らないこのごろ風に散る葉  
 ほほづきの赤いあの家の前も通つてふるさと  
 今晩君と星をみてゐる君が征く空の星  
 暑い陽を落してからの畑物さぶさぶ水やつてゐる  
 雲をでた月へあげた四ツ手網のはれるさこ  
 川音は山の冬へかか一つてゐる橋  
 更けて木に星が動く舉國たたかつてゐる  
 川おと麥の芽道あり教へられてゆく  
 ことしまた小米の花の白く咲くよい雨になる  
 疎林ぬけると雪にれむつてゐる牧場であつたり朝の日  
 防空はしごは雪にかけておく雀二三羽  
 干菜雑炊の釜の蓋が丸くて日ざしが彼岸  
 けさことに霜のきびしい山に月かけありて年明けける  
 明け方警報すぐ解除正月四日の空曇り工員の列  
 ばくおんも寒い日角帽買つて歸る

三好米子

横關碧樓

胸張つてゆく癖つけようと思ひ正月の風に吹かれてゆく  
 八十を一つ越した杵ふりあげて寒餅を搗く  
 素直に生きよう水の流れてゐる春  
 枯桑の枝の影ばかり雪の桑畑

井形春一

渡邊燕兒

木庭暗龍子  
 關口江畔

青木美岐雄

落窪京太郎

山岸稻青  
 金平二火

山岸稻青

櫻田悠子

洲河仲一

洲河仲一

鹽崎寸南夫

洲河仲一

洲河仲一

短日、たづねてホストのある角をまがりて其の裏  
 夜は青白い粟の花の房明けてある  
 牛を曳く山みち乾くままに夏の日  
 テントウダマシが地べたに落ちて雲の中の爆音  
 南瓜の花に蜂が出たり入つたり暑くなりさうな  
 お練香よう燃えて亡母のお墓の閑古鳥  
 あきつ火のやうに行く秋は風の中行くこころ  
 山の 春へ灯して一軒  
 尼さん足袋などほしてある木の芽吹いてある  
 冬の小鳥の来て工場休日となりばんしてある  
 警報解除やがて朝日の出でて屋根屋根霜  
 婦人會してその訓練月が出た道をもどる  
 空の夕曉雲を一機、基地近い高度で  
 歸つても寝るばかりの、ちらちら降る雪  
 草は枯れたままの家のまばりの草にふる雨  
 雪の日二羽のにはとり卵うんだとよ  
 春になる雨道の下が海のいはほにふる  
 飛行機頭上を通つてからの月が雪の梢  
 雪空海も鳴る日の松根を揺る  
 練香の赤い紙がいぶる冬の初め、墓  
 殿しい冬の、月がことしの枯木をたしてある  
 朝はゲートル巻きで近道梅の花つばみ  
 名將の墓標が松の下松の落葉水霜  
 貫け飛行雲を追うていく一條の飛行雲だ  
 毎日降りつゞく雨降り青田白さき

鈴木梅宇人

甲子 梧

早川 昇

芦立陶抄子

佐藤 康治

三浦 香女

長山 林二

日向野 秀策

村瀬 汀火骨

岡野 宵火

木村 飛泉子  
松田 一男

きのふけぶ空襲のない空から目白のきてある聲  
 梅の咲いたことも梅の木のそば防空壕も月夜  
 ふきのとう、うちの鶏が卵生むやうになつて  
 干大根よう干せる風がこのころ毎日警報が出る  
 警報の、空を突き刺すやうな校ばかりで晴れ  
 衛門に春の陽さし此頃日に一度の郵便屋さんです  
 雪からばえた木の枝に夕星が出た、山の上にも  
 雪の消えると又積る日の製繩機音たててある  
 雪撃友軍機である水槽を満たしてある  
 朝のつめたききらめく星の火をおこす  
 みうちばかりのささやかな葬ひに吹雪いてある  
 毎朝霜の麥のちよつぴりと青い道勤めにゆく  
 雪踏みかためて道にし道をはなれて住んで月の夜  
 冬空青い無花果の芽の朝は浪音  
 どうどう打ち寄せてある三日月  
 パスはない伊賀へ三里串柿もらつて二人で歩く  
 少し寒いときむいにつけて正月よその子供ばかり  
 竹藪うしろに暖い日ざしここに客となりて  
 日和で寒い早春の林行くに人聲  
 芽ぶいた枝が夜になつてあるうごいてある  
 雪の阿蘇は煙靜かに子を負うて麥ふんである  
 鯛ひとり暮れてゆく山がけふも終つてある  
 春が昏れるときの工場地帯のけむり警戒もなくて

内久根 聖巳

澤木 正

法雲寺 三郎

高本 三蔵

藻谷草 土史

夏堀 望子

小原 甲陵

角田 重信

高橋 政二

武鏈 青杏子

高橋 一洵

木野本鳥 不止  
飯田 露草  
細谷 野蔭  
佐々木 行人  
照井 燈光  
白石 一光路  
近藤 次良  
木村 幸雄

遠い耳もつて坐つてゐるゐなか  
石に散る葉を水奔る

日向野 千一路  
親井 牽牛花

終戦の悲しみの日中蟻のいとなみを見る  
秋空からりと晴れてみいくさは終りアンテナに雀がある  
夏草茂るたけ茂つて兵隊のゐない陣地一帯

赤子の聲がとも猫のなくにて夜の雪とける

長塚 千里夫

雪降れば静かな弱い身體にて新聞  
乏しきになれて我は黄菊 白菊

土屋 曜子

これが爆彈の穴とよ梅の花の散りやう  
棉の花赤し白しひそやかにぬれてなる

野中 白浪子  
川 延 謹 造

低空そこを行つた一機の蔵王の山が冬めく  
並木のいてふ散つてしまつたあとの夕空

梶本 芦城

遠雷のやうな、もりあがる雲が栗の花  
海ひかるときのすすき 白い穂

鹽田 正香

あした新聞きたり來なかつたりこの頃涼しすぎる  
朝は雀の聲も燕の白さももう冬

堀 切 春 扇

眼を病んでゐては梅もつばみのやうな  
きものででてきたのも春雨やんだらしく

すつかり木の葉の落ちてしまつたはたきの昔日のさし  
ラオオ講演春のはなし空襲の夜が明けてより

堀 切 春 扇

姑娘の瞳は美し葱に花さいてゐる  
決戦食にとあが植ゑし馬鈴薯の花など白い雲ゆく

堀 切 春 扇

歸ると泣く子があて家の畑のたくまし青もの  
戦局がどうあらうとも満洲に腰すゑた心ででかい夏雲

萩原 和夫

三日月が春になる橋のたもとの交番  
ひがんげなふつてゐる傘さして出る

堀 切 春 扇

梅雨ふるけむりを遣はせて汽船でてゆく  
これが上陸用舟艇の、鰻を満載してまきに春

あめのあとの朝がからりと芋の葉  
落葉霧が上るのであき明けてゐる

御 井 弓 弦

その聲船皆荒濤へ向いて漕ぎ出る聲  
梅雨もからりと雲ゆるやかに桐の葉ゆれてゐる

トットは露のままにもいで來てくれてわたしの手に  
風ふくと莖が花が垣に垣豆の紫に咲き

御 井 弓 弦

新聞は読んでおき庭の栗色づいてゐる  
戦は終つた秋晴れの戦闘帽被り直して出る

吉川 哲男

夏の日こま豆腐賣は自轉車でくる  
輻とりぐもも壁に動かぬあつき見てゐるれてゐる

伊 藤 三 瀧

にらの花の白さへ蝶のきてゐる  
雨に落葉する夜の無花果へふつてる雨

ひもすがら梅に照る日の、砂利探る船がきてゐる  
風が月夜の梅の花白く咲いてゐる

石 川 舟 洋

辻村追鳥子

古里に戻つては涼しくひとり黙つて働くことだ

石 川 舟 洋

辻村追鳥子

夕燒空を一機ゆくねむの葉閉ぢてゆく  
 製板機の絶業が秋の氣配ひしひしと夕べ  
 たうきび黄色く吊り干して鍼灸治療所  
 燒跡、月毎の月が中秋の月になる  
 汽車ゆく音の、秋の水音してゐる  
 そこを曲るとずうつと燒跡ひるの軋  
 秋ざくらこの家醫者の俾らしく晝すぎ  
 父は征つてゐる父に似た子の爪を摘む  
 雪原へ學校の門が開いて晴れて  
 白い海と國道そして菜の花四角く咲いてゐる  
 兵は山へ來て遊び鳥は林へ來て鳴く  
 水なみなみと釣りあげて文  
 葉裏見せてゐる菱の葉も水も日盛り  
 ひとり出てみる冬の雲が池の中  
 煙突風がなくて春の雲がある  
 春雨が沖の島かけの軍艦から晴れた  
 自轉車のうしろへ葱四五本が町の風景  
 雪眞白に朝を一機東進す  
 苺の花夕方は雨がふりだしてゐる  
 青空葉がふる工場へ歌つてゆく一隊女の子  
 櫻の木の葉も少し赤くなつて訓練終るころ  
 灯の入つた家と三日月と山道になる  
 硝子窓に當つてとると秋雨、飯にしてゐる

坂田義三

小川和成

東信太郎

吉村しをり

三井不二雄

多胡比左志

上原今一

菅無極

阡陌多代

宇野喬子

藤本零餘子

南瓜が成つたことの話子供は疎開させての暮し  
 草はみんな實となりお彼岸よい天氣となる  
 もうつばめが來てゐると蝶の中から  
 月ののぼり月夜の鳴きいでて蛙鳴きわたり  
 いなかに舊正月の柿の木のからす  
 くれるとちらちらする雪汽車が暗くしてゆく  
 けふがぬくとく馬車が川添ひの道の小石  
 山に白い煙が山の夕目になつてゐる  
 そんな、ふつと思出のやうな雪の残つてゐる笹むら  
 待遊樂と馬鈴薯の花とけふの日靜かにはいり  
 物ひく音のしづかな日盛りの村を通る  
 今はもう警報も鳴らない秋雲の通る  
 母よ大詔のけふからは鉢の花にやる水  
 こんな所に橋が道があつて炭を負うてくる  
 疎開跡の随分と積つた雪の青菜

水野田々詩  
 富田南龍子  
 上山榮一  
 蓮見牛里  
 大鹽白々  
 金子芳園  
 小池千代子  
 中村五倍子  
 關根ふさ子  
 助田小芳  
 三井すみ夫  
 安田爐中火  
 加藤黛杉子  
 谷雨滴

御願ひ

會員が罹災した爲に、送本しても若干は不着で返送されてきます。ま  
 だ新住所の御通知を頂いてゐない方が多く困てゐますから、是非各社へ  
 御一報願ひたい。御知友がたへもこの事お傳へ下さい。

# 有隣亭藏書

## 編輯後記

○本誌を以て選刊を取返すことが出来た。これは、本誌の協力者菅生氏のまつたくの御好意によるもので、私達は氏へ感謝せなければならぬ。今後共よろしく御願ひいたします。

○本誌は今月號から頁数をふやすことにした。そして、初心者向きの讀物を掲載したい心組である。誌代の變更が多少あるかも知れないが、あらかじめ申上げて置く。

○本誌は明年を期して俳句日本社の句會を、また、その他の催しを行ひたいと考へてゐる。各社の復員者は學徒諸君が多いやうであり、今後はこの人々の進出に期待をかけてよろしからう。論客で編輯者が知つてゐるものも歸還して來たから、本誌も近いうちににぎやかとならう。復員諸君の御投稿を待望する。

○本誌掲載の西東八十八君のものに就きおことわりして置きたい。本原稿は本誌がまだ創刊にならぬ

以前に成つたもので、大分日時が経過してゐる。又、内容も宣傳に落ちたかに見ゆる箇所も認められ、そこに投ぜられてゐる問題は、いつ取り上げられてもよい程の批判的なれうちばあるやうに感ぜられた。なほ又、俳句界が終戦と云ふ現實から定型、非定型を通じて、今後どう變化するかに就いても、關心せなければならぬものと思はれるから、かかる時機に、本稿の掲載は色々な意味でよき反省を與へられるものであると思ふ。ただし、作者の批評をなした理論的根據は、生活俳句の見方に迄言及して述べられてゐたが、都合上削除した。この點に關して讀者はじめ筆者にも一應御了承願つて置く。

○以前に課題して論稿を募集したことがある。然し、一人も応募者がなかつた。あれは編輯者の失敗であつたかも知れない。が、今後の青年は大いに批判の自由を自覺してもよろしからう。兎に角、活潑なる批評を望みたいものである。

(中禪子)

## 投稿略規

○論文、隨筆等、(なるべく簡契なるもの)

○俳句日本作品(社選)  
句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○選句錄  
荻原井泉水選のもの神奈川大船町建長寺前荻原井泉水へ  
中塚一碧樓選のもの世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ  
藤垣出禪子選のもの足立區伊興町狭間八八七西垣出禪子へ

○句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿、一選者に限る事

一、締切 毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各社の發行所宛に小爲替にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

○送金せられたし。

## 本誌定價

一冊分 金八十錢五送  
六冊分 金四圓八十錢五送  
十二冊分 金九圓六十錢同

○前金(なるべく小振替)で御拂込下さい。

○必ず何月號よりと御指定の事。  
○御轉居の際は發送部宛御報下下さい。

第二卷 第一號  
昭和二十年十月廿五日印刷納本  
昭和三十年十一月一日發行

發行人 中塚直三  
編輯人 西垣隆滿  
印刷人 石上利雄

發行所 東京都立川市曙町三丁目五番地  
印刷所 行政學會印刷所 東京五

發行所 俳句日本社  
東京都足立區伊興町狭間八八七  
日本出版會 二一五〇再  
會員番號

配給元 日本出版配給株式會社  
東京都神田區淡路町二ノ九